

平尾山古墳群

1999年度

2000年3月

柏原市教育委員会

は し が き

昨今の文化財行政を取りまく環境は、大きく変わりつつあります。これまでの発掘調査を中心とした埋蔵文化財行政だけでなく、幅広い文化財が注目されるようになる一方、埋蔵文化財においても、その対象や調査方法をめぐって、さまざまな見解が生じています。そこに、地方分権や不況がからまって、文化財行政は大きな転換期にあるといえるでしょう。

本市においても、不況のためか調査件数は減少傾向にあります。その一方、建造物や民俗、古文書といった、これまで十分に取り組んでこれなかった分野が大きな比重を占めるようになってきました。また、学校や市民の要望もあり、普及活動にも積極的に取り組みつつあります。

埋蔵文化財においては、これまでどおり、積極的な保存策を講じ、やむを得ず保存できない場合には綿密な調査を実施することによって、対応していくこととなるでしょう。その他の文化財についても、埋蔵文化財と同様に、消滅していくものは記録に留め、積極的な保存策を講じていくことが必要となるでしょう。市民のみなさまのご理解とご協力を切に要望します。

本書においては、公共事業に伴う発掘調査の概要と、過去の調査に伴う資料の再整理を掲載しております。今後とも、実施した調査、所蔵資料の公表には積極的に取り組んでいきたいと考えております。

平成12年3月

柏原市教育委員会

教育長 舟橋清光

例 言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、平成11年1月から12月の間に、公共事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の概要と、平尾山古墳群における3件の調査内容についての発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史が担当した。
3. 付章として、昭和58年度に実施した鳥坂寺(高井田廃寺)僧房と推定される遺構の周辺から出土した平瓦の再整理結果について紹介している。
4. 本書の編集・執筆・製図等は、すべて安村が担当した。
5. 本書で使用した方位は座標北(国家座標第Ⅵ系)、標高はT.P.である。
6. 調査・整理の参加者は下記のとおりである。

橘谷 和夫	隠木 讓	柳谷 好子	川端 隆	北野 重	石田 成年
寺川 款	谷口 京子	奥野 清	分才 隆司	堀 定夫	尾野 絹江
新田太加茂	有江マスマ	乃一 敏恵	橋口 紀子	松本 和子	山元 充子

目 次

第1章 概要	1
第2章 平尾山古墳群99-1次調査	3
第3章 平尾山古墳群99-3次調査	7
第4章 平尾山古墳群99-4次調査	14
付 章 鳥坂寺僧房跡周辺出土平瓦の再整理	16

第1章 概 要

まず初めに断っておくが、本書は『平尾山古墳群』という書名ではあるが、古墳についての報告はまったくない。平尾山古墳群の範囲内での調査結果を報告するものであるので、誤解のないようをお願いしたい。

1999年1月から12月の間に、文化財保護法57条-3に基づく通知に伴って実施した発掘調査は全部で5件である。内訳は平尾山古墳群で3件、船橋遺跡で1件、玉手山遺跡で1件である。本書では、このうち平尾山古墳群内で実施した3件の調査についての概要を報告する。なお、船橋遺跡、玉手山遺跡の調査では、遺構・遺物ともに発見されていない。(図-2、表-1)

同じ期間内に、57条-3(通知)に伴う立会調査は12件実施した。内訳は本郷遺跡1件、山ノ井遺跡1件、大県遺跡5件、玉手山遺跡3件、田辺遺跡1件、北峯古墳群1件である。このうち北峯古墳群は学校校舎建設に伴うものであるが、他はすべて下水道工事に伴う立会調査である。立会調査に伴って遺物が出土したのは大県遺跡における1件のみであり、他はすべて遺構・遺物ともに発見されていない。

遺物が出土したのは、平成11年8月26日、堅下小学校内北西部のうさぎ小屋の前を掘削中であった。地表下70cm以下に暗灰色粘質土がみられ、この土層から、弥生土器・土師器・須恵器・瓦・鉄滓などが出土した。掘削は地表下150cmまで掘り下げられたが、明瞭な土層の変化は認められなかった。その後、数日間立会を続け、掘削残土から遺物の採集を試みたが、遺物が出土するのはごく一部の区間だけであり、東側の道路部分では、過去の攪乱によって、遺物包含層はまったく認められなかった。(図-2の★)

出土遺物のうち、図化できたものは図-1の3点である。1は弥生土器。おそらく壺の底部であろう。底は厚く上げ底であり、内外面ともにナデで仕上げる。褐色を呈し、生駒山地西麓の胎土である。2は須恵器の蓋である。有蓋短頸壺の蓋であろう。口縁端部は凹面をなし、天井部回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整である。3は平瓦片。凸面にはナデを施した後に無軸綾杉の叩きが重ねてみられ、凹面は布目をタテ方向のヘラケズリによって消している。灰色を呈し、焼成は良好である。鉄滓は、長径9.4cmと7.6cmのもの2点あり、どちらも椀形滓である。重さはそれぞれ310gと244g。前者には、須恵器の小片が含まれている。以上のように、立会調査で確認した暗灰色粘質土は、弥生時代から奈良時代頃にかけての遺物包含層と考えられる。

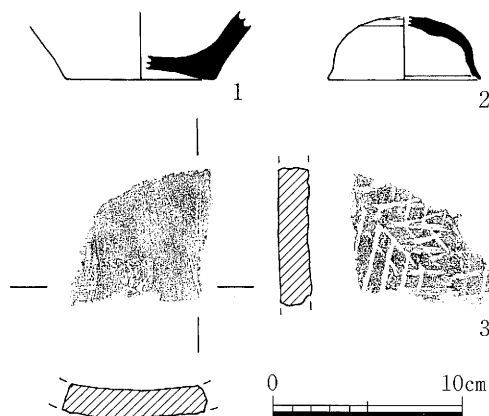


図-1 大県遺跡立会調査出土遺物

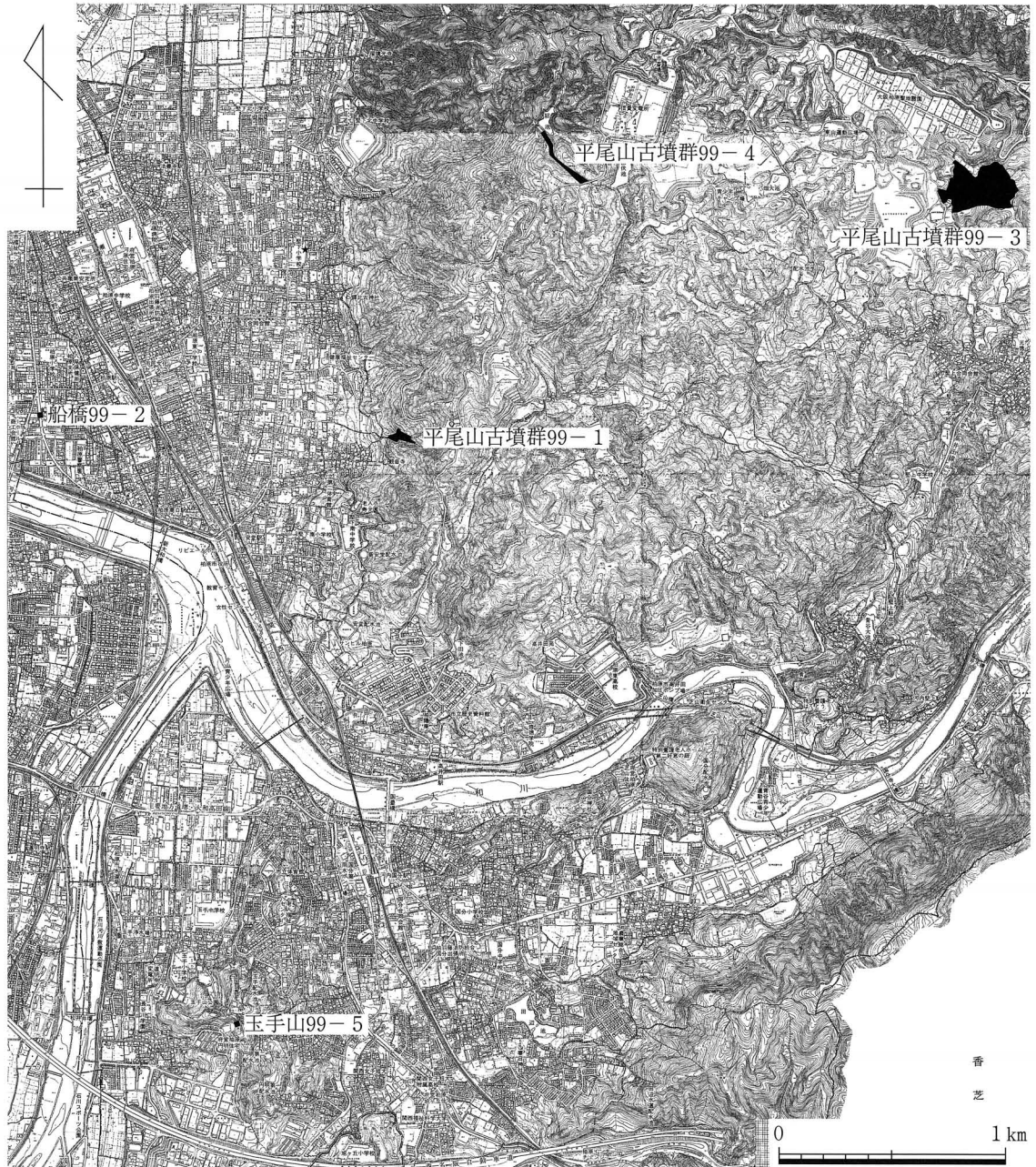


図-2 調査地位置図

遺跡名	所在地	調査面積 ^{m²}	申請者	用途	調査期日	備考
平尾山古墳群99-1	太平寺～安堂	10/4,193	大阪府八尾土木事務所 所長 高本 敏	ダム建設	3.3～ 3.16	本書P3掲載
平尾山古墳群99-3	雁多尾畑1784外	35.5/61,667	柏羽藤環境事業組合 管理者 福谷剛蔵	一般廃棄物焼却残渣 最終処分場建設	3.18～ 3.29	本書P7掲載
平尾山古墳群99-4	平野地内	12/3,572	柏原市長 山西 敏一	ため池改修	12.1～ 12.6	本書P14掲載
船橋99-2	古町3丁目地内	23/1,403	柏原市長 山西 敏一	下水道工事	11.22～ 11.25	遺構・遺物なし
玉手山99-5	円明町225	2.3/43	柏原市長 山西 敏一	公衆便所建設	10.28	遺構・遺物なし

表-1 57条-3に伴う発掘調査(1999年1月～12月)

第2章 平尾山古墳群99－1次調査

1. 概要

大阪府八尾土木事務所では、柏原市太平寺から安堂にかけて砂防ダムを建設する工事が計画され、平成10年12月15日付けで、文化財保護法57条の3に基づく発掘通知書が、柏原市教育委員会に提出された。当該地は平尾山古墳群に含まれることから、本市教育委員会では、発掘調査が必要との意見を付して大阪府教育委員会に通知書を送付するとともに、ただちに八尾土木事務所と協議にはいった。その結果、現地の分布調査を実施した後に試掘調査を実施し、その結果をみて発掘調査について改めて協議することになった。

平成11年1月8日に分布調査を実施したが、高さ2～3mの笹竹が繁茂しており、現況の地形を把握するのが精一杯で、対象地のすべてを歩くことさえ不可能であった。その後、1月27日に八尾土木事務所と現地で協議し、笹竹の伐採を申し入れたが、早急に対応することは困難であるとの回答であった。そのため、現地地形から考えて、古墳が存在する可能性のある調査対象地の北側、すなわち南向きの斜面に対して、工事による影響の考えられる範囲を対象として、本市で伐採、試掘調査を実施することとなった。

伐採は、八尾土木事務所の指示に従って、2月15日より実施した。その後、試掘調査予定地の伐採がほぼ終了したため、2月26日に試掘調査位置の確認のため八尾土木事務所に立ち会いを求めたところ、当初に示された工事予定地が、実際の工事予定地とかなりずれていることが判明し、改めて伐採をせざるをえなくなるという事態も生じた。

試掘調査は、ダム本体予定地の北側斜面上部に長さ10m、幅1mの北東から南西に延びるトレンチを設定して実施することにし、必要に応じて拡張することにした。調査は3月16日まで、実働4日間で実施した。その結果、調査範囲を広げての発掘調査の必要はないと判断されたため、工事中に立ち会うことを条件に、発掘調査は実施しないこととした。

2. 周辺の環境

調査対象地の谷は、太平寺と安堂の大字界をなす谷であり、平尾山古墳群の平野・大県支群と太平寺支群を画している谷でもある。これまでの分布調査、発掘調査では、調査対象地の近辺で古墳は確認されていないが、調査対象地の北東500mには平野・大県第20支群として3基の古墳が知られている。この中で、2号墳は全長50mの前方後円墳とされているが、未調査である⁽¹⁾。3号墳は直径約40mの円墳で、平成4年に墓地造成に伴って発掘調査を実施している。全長11.4mの両袖式の横穴式石室からは、環頭の柄頭や馬具、ミニチュアの炊飯具などが出土し、規模からも遺物からも、平野・大県支群で中心的な位置を占める古墳として評価できるであろう。築造時期は6世紀中葉ごろと考えられるが、調査後の造成によって古墳は現存しない⁽²⁾。

調査地の南東500m付近には、太平寺支群第4支群が位置する。第4支群は6基の古墳が確認さ

れており、1号墳と4号墳の調査が実施されている。1号墳は、昭和56年に土取り工事によって半壊状態となって調査され、調査時は天冠山1号墳と報告されている。直径約13mの円墳で、幅約1m、長さ3.5m前後の無袖式横穴式石室を主体部とし、出土した土器から7世紀前葉頃の築造と考えられる⁽³⁾。4号墳は、昭和58年に調査が実施され、天冠山東1号墳と報告されている。幅2.6m、長さ7m前後の無袖式横穴式石室を主体部とし、床面下には鉄滓を含む木炭が敷かれていた。須恵器の小形高坏、刀子とともに、土師器の小形高坏、神功開寶など8世紀代の遺物も出土している。築造は、7世紀前葉頃であろうか。他の古墳は調査が実施されていないため詳細は不明であるが、いずれも直径10~20mの小規模な円墳と推定される。

平野・大県第20支群と太平寺第4支群は、ともに南北に延びる尾根上に位置し、市道大県信貴線が通過する凹部によって区別されている。この凹部から西へ深く切り込む谷が、今回調査対象となった谷である。前者の支群は6世紀代のかかなり有力者の古墳と考えられるが、後者の支群は7世紀代を中心とする規模の小さい古墳によって構成される。よって両支群は性格的にもかなり異なるものであるが、まったく別の支群と評価してよいものかどうか疑問である。調査対象地となった谷には里道が存在し、古墳時代まで遡って道として機能していた可能性も考えられる。このような支群を平野・大県支群と太平寺支群に区別することには問題があり、むしろ同一の支群と評価すべきではないだろうか。支群区分の難しい点である。

調査地南半の北向きの斜面は非常に傾斜が強く、古墳の存在は考え難いが、北半の南向きの斜面は傾斜がやや緩やかであり、南向きという立地からも、古墳が存在する可能性の考えられる地形を呈していた。そこで、ダム本体の最北端部、斜面の最も高い位置にトレンチを設定した。

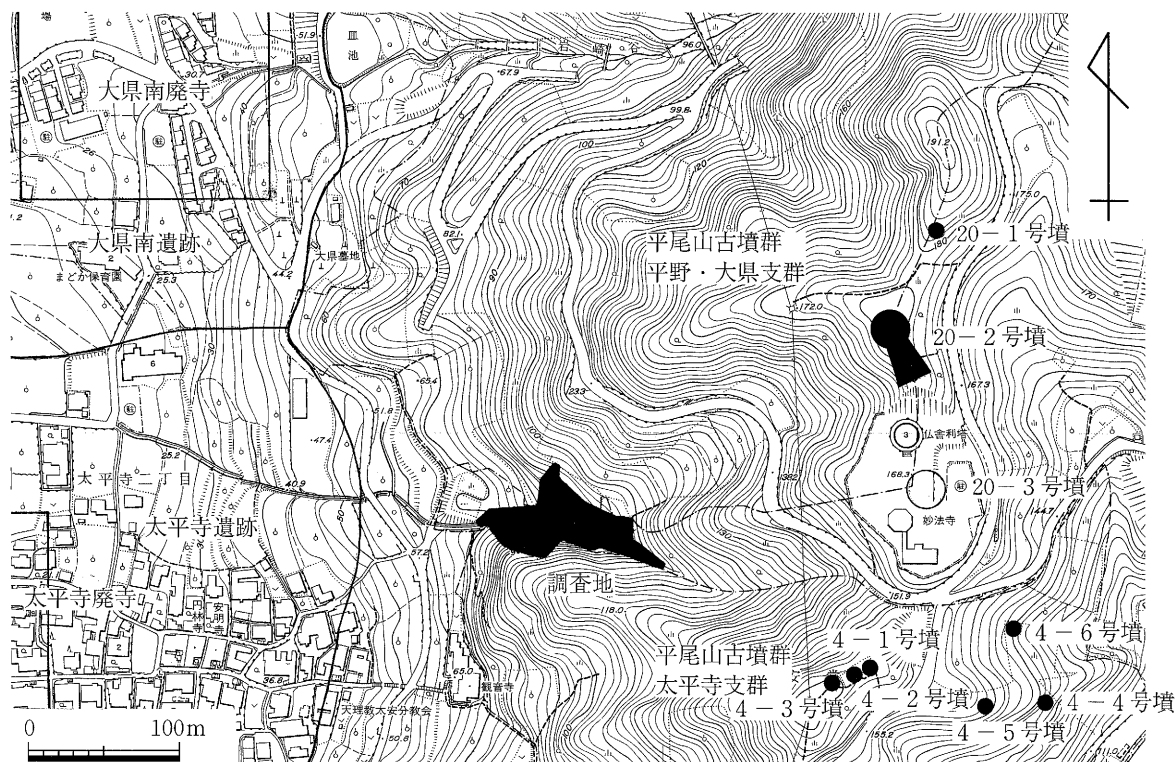


図-3 調査地位置図

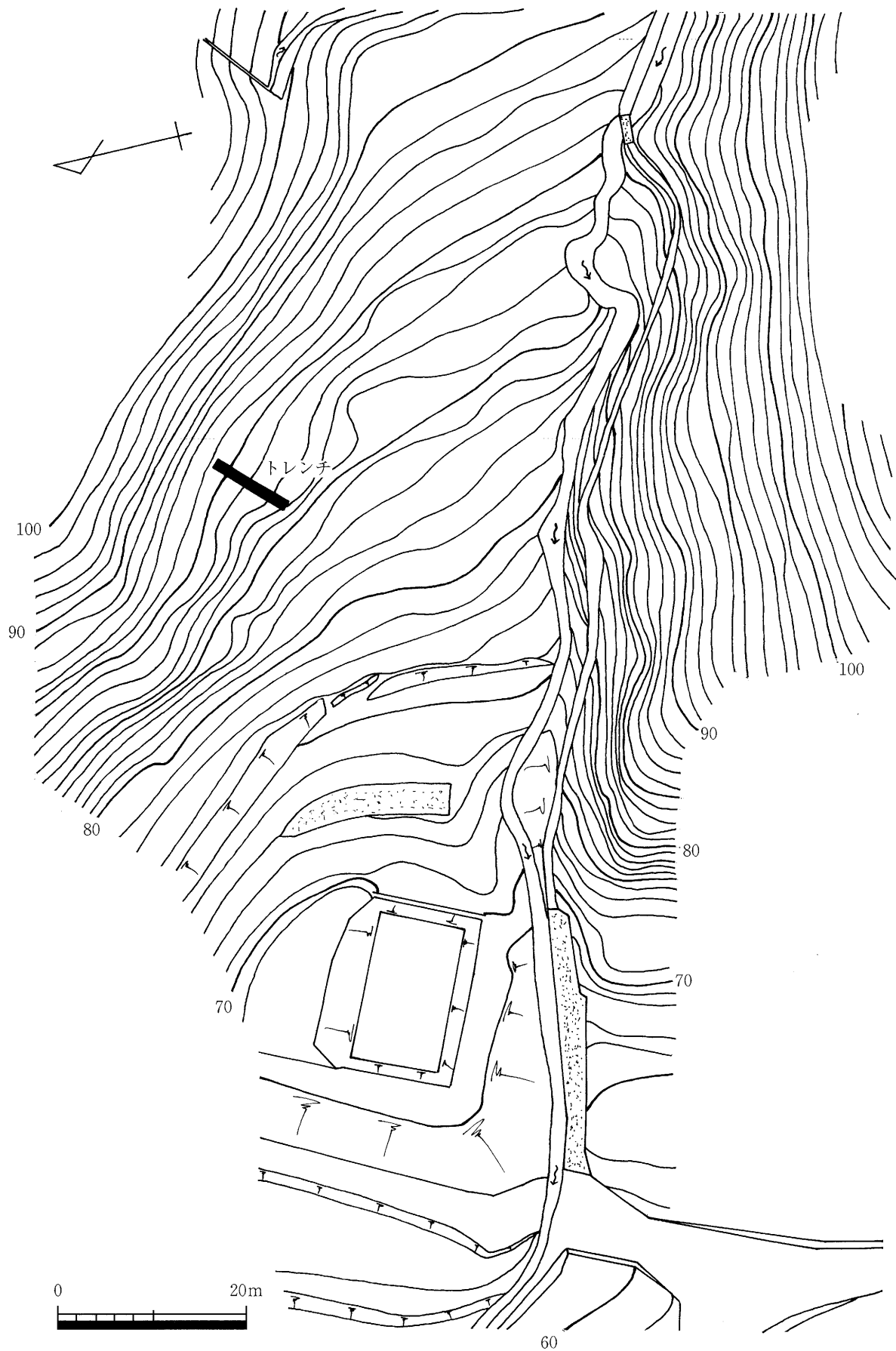


図-4 調査地地形図

1. 暗灰色土
2. 黒灰色土
3. 淡黒灰色土
4. 緑灰色粘質土
5. 黒褐色土
6. 灰色粘質土
7. 黒褐色粘質土
8. 褐色粘質土

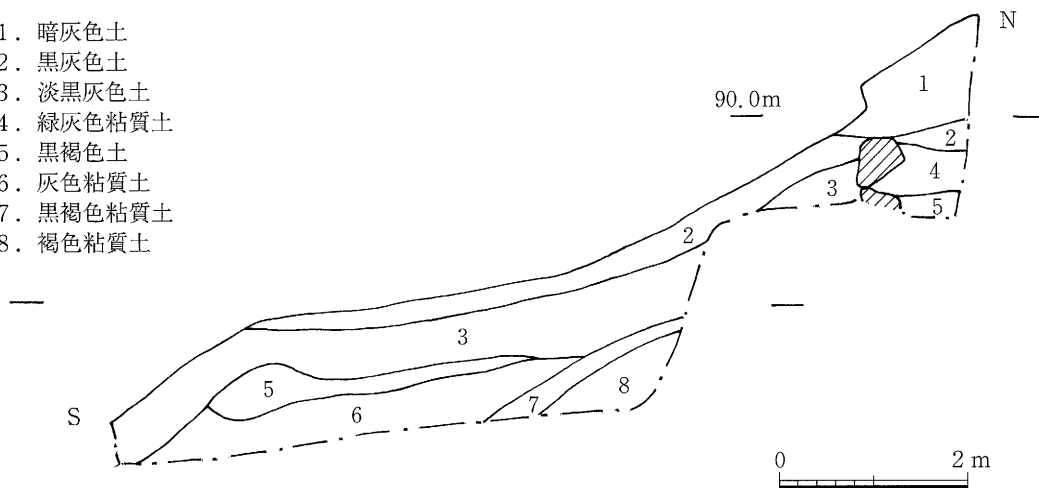


図-5 トレンチ西壁土層図

3. 調査結果

調査は、笹竹を伐採した後、人力で掘り下げて実施した。しかし、笹竹の根と非常に堅く締まった土、さらに礫や巨石を多量に含んでいたため、掘り下げには難渋し、トレンチ北端部では掘り下げを断念せざるを得なかった。

第1層から第6層までは、斜面上方からの流入土である。その中でも第5層黒褐色土は礫を多量に含み、堅く締まっている。第7層黒褐色粘質土、第8層褐色粘質土は、少量の土師器を含む遺物包含層である。堆積状況から考えると、やはり斜面上方からの流入土と考えられる。出土土器からは、8世紀代の包含層と判断してよいであろう。遺構はまったく確認できなかった。

出土土器は、土師器の坏、甕、羽釜の破片等であるが、最も残存状態がよく、かつ個体数の多いのが、小形手づくねの高坏である。図化した2点は、いずれも第7層黒褐色粘質土から出土したものである。坏部はナデ、脚部外面は指ナデ、裾部から内面にかけては指オサエで調整する。暗橙色を呈し、雲母等の砂粒をわずかに含んでいる。

4. まとめ

調査対象地は、斜面上方から押し出された土砂によって、かなり地形が改変されているようである。傾斜の緩やかな現在の地形も、後世の改変によるものであり、本来はもっと傾斜が強かったと考えられる。このような状況を考えると、古墳が存在する可能性は、かなり低いように思われる。また、調査で出土した小形手づくねの高坏は、先述のように太平寺第4支群4号墳の石室内からも出土しており、これ以外にも太平寺周辺の山麓部でしばしば出土をみるものである。出土状況から大半は8世紀代と考えられ、何らかの祭祀に伴う遺物と考えられるが、実態は不明である⁽⁵⁾。

以上のような調査結果に基づいて、八尾土木事務所と協議し、面積を広げでの発掘調査は実施せず、ダム建設工事中の立会調査で対応することになった。その後、2月末現在では、工事はまだ着手されていない。

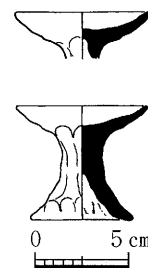


図-6 出土土器

第3章 平尾山古墳群99-3次調査

1. 概要

柏羽藤環境事業組合(管理者 福谷剛蔵)より、柏原市雁多尾畑に計画中の一般廃棄物焼却残渣最終処分場の建設について、環境アセスメントを実施しており、文化財への今後の対応についても協議したいとの申し出があり、平成10年10月9日に協議をもった。

その結果、対象地には柏原市文化財分布図に4基の古墳が掲載されていることが確認され、かなり広範囲に及ぶことから、まず分布調査を実施し、その成果をもとに試掘調査を実施する。試掘調査の結果によって、発掘調査の内容について検討する。分布調査、試掘調査の費用は柏原市で負担するが、発掘調査の実施が必要となった場合は、柏羽藤環境事業組合の費用負担とするということで、今後進めていくこととなった。

その後、平成10年10月14日付けで、柏羽藤環境事業組合から埋蔵文化財包蔵地確認分布調査依頼書が柏原市教育委員会に提出され、下草等の影響を考え、年が明けてから分布調査を実施することで合意した。

平成11年1月18日、現地で柏羽藤環境事業組合とともに調査対象地を歩き、範囲や地形について確認をし、協議をもった。分布調査は1月20日に実施することにした。分布調査は1日で終了し、その結果、古墳の可能性のある地点が、分布図に掲載されている3基を含めて8箇所を確認され、これらの地点と尾根の頂部、張り出し部など計13箇所を試掘調査が必要という結果を柏羽藤環境事

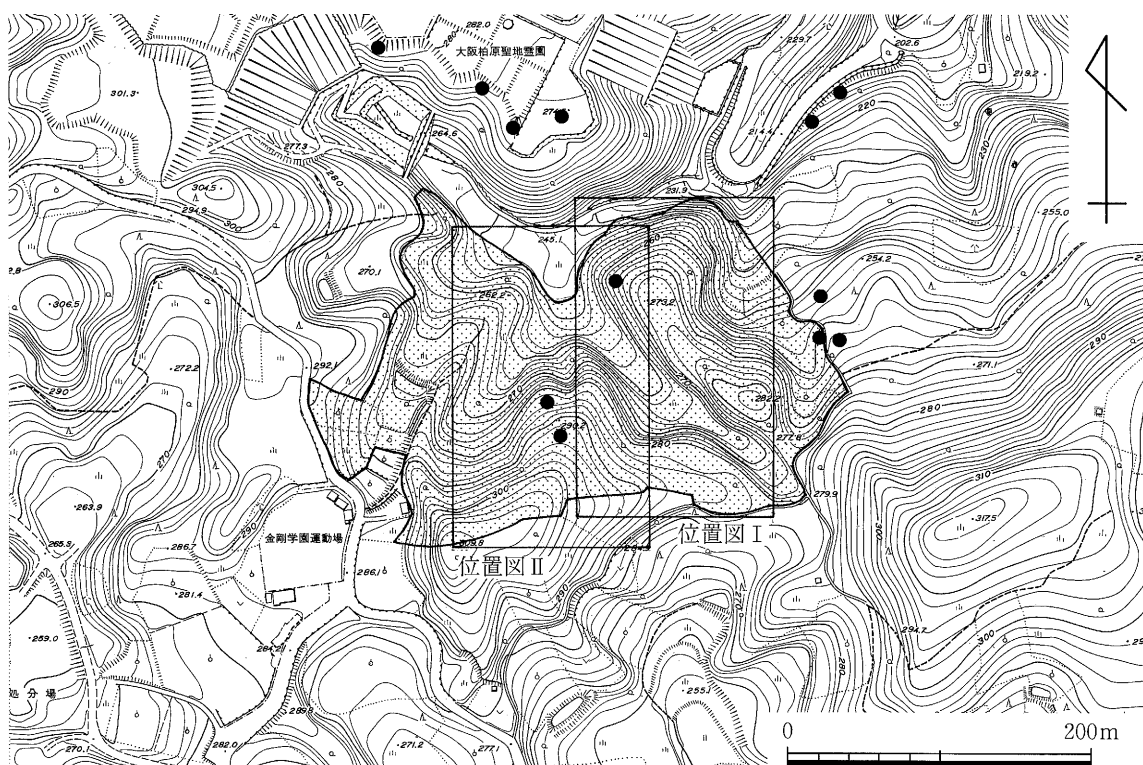


図-7 調査地全体図

業組合へ文書で回答した。

その後、柏羽藤環境事業組合から平成11年2月1日付けで文化財保護法57条の3に基づく発掘通知書が提出され、試掘調査の日程等について協議を実施した。その結果、大阪府八尾土木事務所の試掘調査(平尾山古墳群99-1次調査)が終了次第に試掘調査に着手し、年度内に調査を終了させることになった。

2. 周辺の環境

調査対象地は、平尾山古墳群雁多畑支群に含まれる。対象地内には、以前の分布調査によって古墳推定地4箇所が確認されており、そのうちの3箇所については、石材の露出や墳丘状の高まりなどが分布調査によって確認できたが、調査対象地東端の1基についてはその存在をまったく確認できなかった。現地形からは、古墳の存在は考え難いように思われる。

調査対象地の北側には、大阪柏原聖地霊園が位置する。この霊園の西端で、昭和60年に10基の古墳や火葬墓を調査し、平尾山古墳群雁多尾畑第49支群として報告している。さらに、今回の調査対象地北側にかけて8基の古墳がドットされており、昭和63年、平成元年に調査を実施したのだが、調査前にかなり造成されており、一部で古墳の存在を確認したものの、調査を行うこともできなかった。⁽⁶⁾

調査対象地周辺では、対象地の東端に接して2基、北東にも2基の古墳がドットされているが、いずれも現況では確認できなかった。過去の地形改変もみられ、一部で石材の露出等がみられるものの、古墳と断定することには頓着される。今後の課題としておきたい。

後述するように、調査対象地内の古墳としてドットされていた地点が、いずれも試掘調査によって古墳ではないことが確認されており、周辺にドットされている古墳推定地の現状を加味して判断すると、調査対象地周辺に古墳が実際に存在するか(したか)どうかも現状では確認できないという結論にならざるを得ない。今後の課題である。

3. 調査結果

調査対象地は、東側の尾根と北へ延びる中央の尾根の大きく2地区に分けることができる。試掘調査は、東側の尾根から着手した。

1 トレンチ

東側尾根頂部の最北端、標高274.6mに設定した幅1m、長さ3mのトレンチである。分布調査の際に、古墳の可能性がある地点としてマークしていた地点である。表土直下で黄褐色砂質土がみられ、地山かと思われたが、非常に軟質で、二次堆積の可能性も考えられた。そのため、さらに1.3m前後の深さまで掘り下げた。黄褐色砂質土の下には明黄褐色砂質土がみられ、部分的に赤褐色を呈する。土層の区分も明瞭にはできず、やはり軟質な状態が続いている。おそらく黄褐色砂質土から地山と考えて間違いないであろう。表土内から土師器の小片が1点だけ出土しているが、そのほかには遺構・遺物は認められなかった。

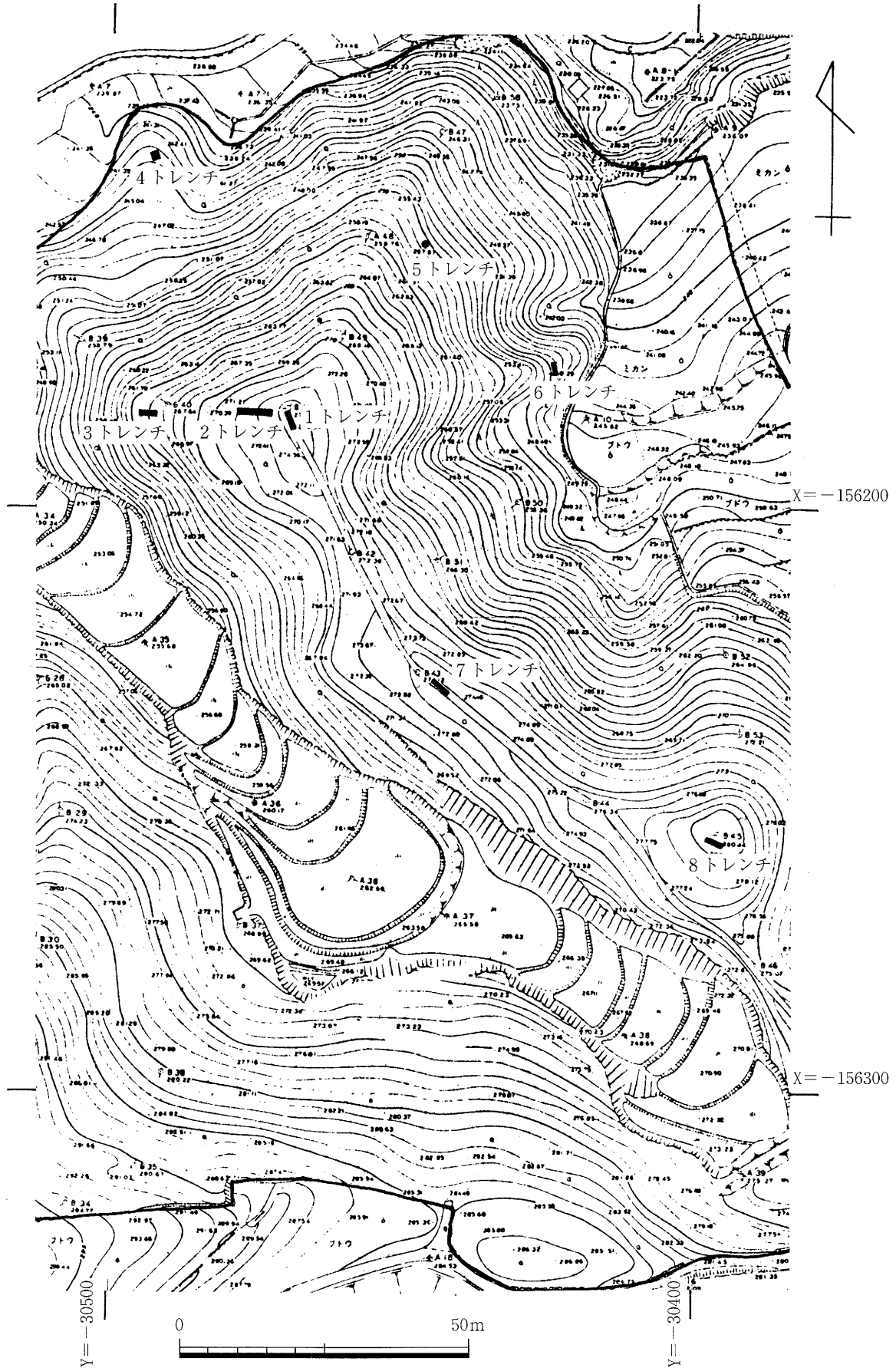


図-8 トレンチ位置図 I

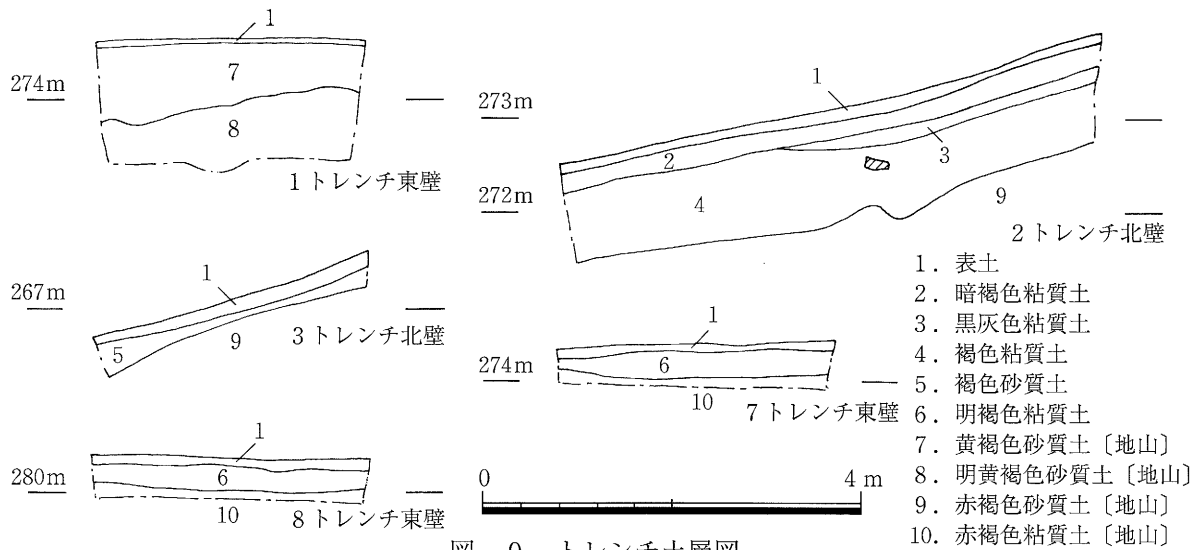


図-9 トレンチ土層図

2 トレンチ

1 トレンチから西へ張り出す尾根筋に設定したトレンチである。当初幅1m、長さ3mで設定したが、土師器が出土し、地山がかなり深いことが確認されたため、1 トレンチとの関係を確認するために、1 トレンチへ向けてさらに3m延長した。地表下約40cmにみられる黒灰色粘質土は、厚さは薄く、有機分に富んだ土層である。その下には60~80cmの厚さの褐色粘質土がみられる。この層からは、土師器片が多数出土しており、安山岩の板石の出土もみる。赤褐色砂質土の地山は、地表下1.2m前後の深さであり、1 トレンチの状況から考えても、人為的な地形改変が考えられる。また、トレンチ中央付近では、トレンチを横断する状態で溝状の痕跡が認められ、遺構の可能性が高いものである。

遺物は、土師器の坏、皿、甕がみられる。いずれも表面の剥離が激しいため、端部の形態や表面調整が不明なものが多い。坏類は、口縁がヨコナデによってやや外反する個体が多く、内外面はナデ、外面底部は指ナデによって仕上げるようである。甕(8)は、口縁部内面を板状工具によってナデた後にヨコナデ、体部は内外面ともにナデで仕上げる。甕(9)は、ほぼ完形に復元できた個体である。口縁部ヨコナデ、内面と外面体部ナデ、外面底部は指ナデ、指オサエで仕上げる。体部はやや扁平な球形を呈し、短い口縁部は緩やかに外反する。

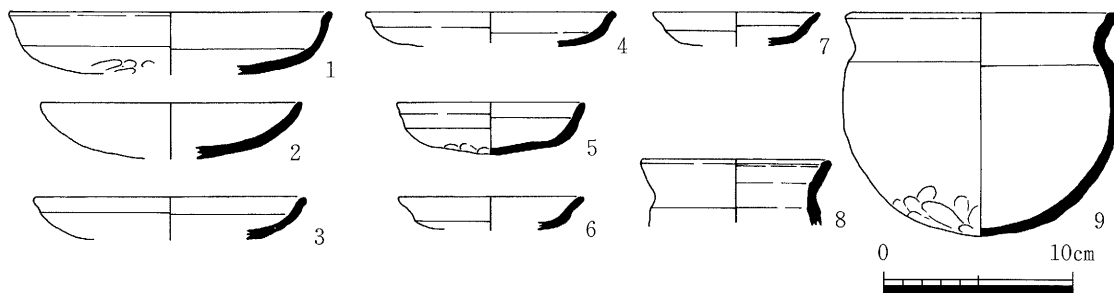


図-10 2 トレンチ出土土器

3 トレンチ

2 トレンチのさらに西、過去の分布調査によって古墳とされていた尾根の張り出し部に設定した幅1m、長さ3mのトレンチである。地表下30~40cmで地山に至り、遺構・遺物は認められなかった。調査結果、および周辺の状況から考えて、古墳の可能性は考えなくてよいであろう。

4 トレンチ

分布調査の際に、積み上げたかのような巨石の露出がみられたため、横穴式石室の可能性のある地点としてマークし、巨石に沿って幅1m、長さ1.2mの規模でトレンチを設定した。約1mまで掘り下げたが、人為的に積み上げたものとは考えられず、斜面上方からの転石が集まったものであると判断した。遺物も認められなかった。

5 トレンチ

やはり分布調査の際に、巨石が並んでいる状況がみられたため、横穴式石室の側壁の可能性があると考えてマークしていた地点にあたる。巨石に沿って、幅0.9m、長さ1mの範囲を掘り下げたが、人為的な痕跡は認められず、これも自然の転石が集まったものと判断した。遺物も出土していない。

6 トレンチ

同様に巨石を積み上げたかのような景観を呈していたため、横穴式石室の可能性があるとマークしていた地点である。巨石が多く、トレンチの設定に難渋し、ようやく幅0.5m、長さ1.2mの範囲を深さ0.5mまで掘り下げた。やはり人為的な石積みとは考えられず、遺物の出土もみなかった。

7 トレンチ

1 トレンチから南東へ延びる尾根の中央鞍部に設定した幅1m、長さ3mのトレンチである。表土直下に明褐色粘質土がみられるが、遺物は認められない。地山は赤褐色粘質土。遺構も認められなかった。

8 トレンチ

7 トレンチのさらに南東、東側の地区で最も標高の高い頂部に設定したトレンチである。標高は280.4mを測り、トレンチの規模は幅1m、長さ3mである。土層の状況は7 トレンチとまったく同一であり、やはり遺構・遺物は認められなかった。

9 トレンチ

9~13 トレンチは、調査対象地の中央の地区に設定したものである。9 トレンチは、墳丘状の形態を呈しており、一部で巨石の露出も認められた。過去の分布調査でも古墳とされており、今回の分布調査でも古墳の可能性が最も高いと考えていた地点にあたる。トレンチは、露出している花崗岩の巨石をまたぐように幅1m、長さ3mで設定した。標高は293m前後である。調査の結果、厚さ10~20cmの表土を剥ぐと花崗岩の風化した地山に至り、巨石も地山内のものであることが確認された。よって、古墳とは考えがたい状況となった。トレンチのすぐ南を里道が通過しており、これが墳丘を迂回したのと考えていたのだが、地山を断ち切った切り通しの道であると判断される。

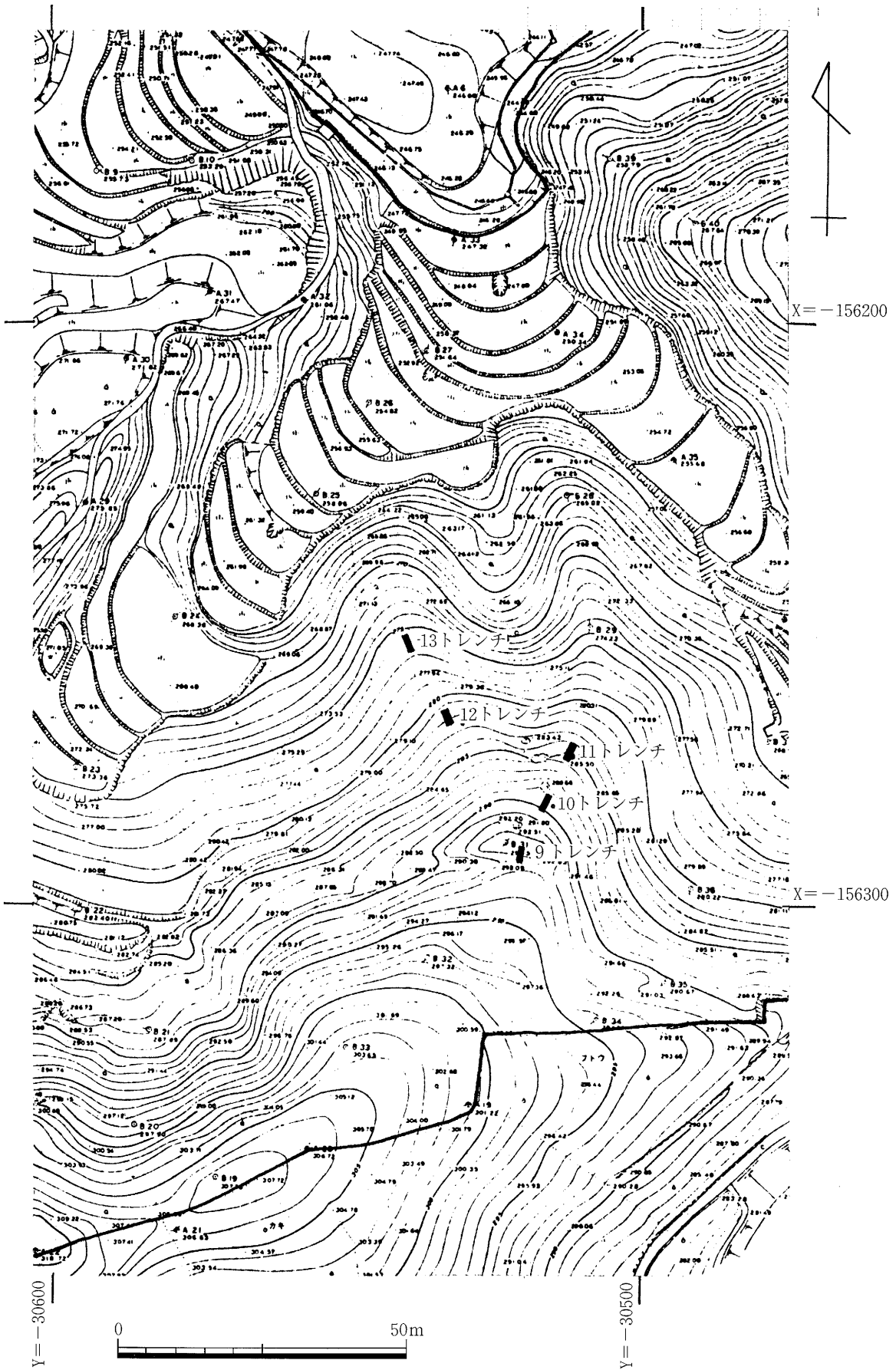


図-11 トレンチ位置図Ⅱ

10トレンチ

9トレンチから北東へ延びる尾根筋に設定した幅1m、長さ3mのトレンチである。周辺に巨石が露出しているため、その間をぬうように設定した。地表下20～35cmで花崗岩の風化した地山に至り、遺構・遺物は認められなかった。やはり、巨石は地山内のものであった。

11トレンチ

10トレンチのさらに北東に幅1m、長さ3mで設定した。やはり巨石が露出しており、分布調査で古墳の可能性があるとマークしていた地点である。地表下15～65cmで花崗岩の風化した地山に至る。土師器の細片が1点出土しているが、時期は不明である。やはり古墳と考えられるものではない。

12トレンチ

9トレンチから北西へ延びる尾根筋に設定した幅1m、長さ3mのトレンチである。地表下40～60cmで花崗岩の風化した地山に至り、遺構・遺物は認められなかった。

13トレンチ

12トレンチのさらに北西に設定した幅1m、長さ3mのトレンチ。花崗岩が露出しており、過去の分布調査で古墳とマークされていた地点にあたる。調査の結果、花崗岩は地山から完全に遊離した状態にあり、横穴式石室とは考えられないものであった。遺物の出土もみられなかった。

4. まとめ

以上のように、過去の分布調査によって4基の古墳がマークされ、今回の分布調査でさらに5箇所古墳の可能性のある地点をマークし、トレンチを設定したが、いずれも古墳とは考えられない状況であった。他の尾根筋に設定したトレンチでも、古墳は確認できなかった。

しかし、東側北端部の2トレンチで土師器が出土し、人為的な地山の改変も認められたため、何らかの遺構が存在するものと考えられる。土師器の時期は、7世紀後半から8世紀前半ごろのものと考えられ、この時期の墓、もしくは何らかの祭祀に関わる遺構が存在するものと思われる。試掘調査の結果からは、尾根頂部を中心に、周辺の地形を改変し、頂部あるいはその周辺で何らかの行為が行われたのであろう。

以上の調査結果を基に、柏羽藤環境事業組合と協議し、1トレンチを中心とし、2トレンチを含む標高270m以上の範囲には遺構の存在が考えられるため、当該範囲を工事計画から除外してもらいたいと要望した。これに対して、基本計画では当該地は進入路の予定地となっており、設計変更が可能かどうか検討し、極力計画から除外するようにしたいという回答を得た。そして工事がこの範囲に及ぶ場合は、影響範囲について発掘調査を実施する必要があることを説明し、理解を求めた。また、他の部分については、工事中の立会で対応することにした。

第4章 平尾山古墳群99－4次調査

1. 概要

調査地は、平尾山古墳群平野・大県支群の東端、雁多尾畑支群と接する位置に当たる。調査地周辺には、これまで古墳の存在は確認されていなかったが、北側や南側では多数の古墳が確認されている。(柏原市教育委員会『柏原市東山地区分布調査概報』1992、柏原市教育委員会『平野・大県古墳群分布調査概報』1993、柏原市教育委員会『平尾山古墳群』1995など)

平成11年11月29日付けで、柏原市長・山西敏一より、文化財保護法57条-3に基づく発掘通知が提出された。工事の内容は、調査地北側に存在する総池の堤を改修し、洪水吐工の実施と取水設備の設置、およびそれに伴い仮設道路を設置するというものであった。これらの工事の中で、仮設道路予定地には、古墳が存在する可能性が考えられた。そのため、切り土工事予定地を対象に、試掘調査を実施する必要がある旨、工事担当の下水道課に回答した。これに対して、下水道課からは、工期が迫っているため、試掘調査に早急に着手してもらいたいと連絡があった。これを受けて、29日のうちに現地で調査方法・範囲等について協議し、12月1日より調査に着手した。

2. 調査結果

調査は、幅1m、長さ4mのトレンチを3箇所を設定して実施した。いずれも切り土予定地の尾根筋に設定したものである。調査地は雑木林であるため、まずトレンチ周辺の樹木の伐採から着手

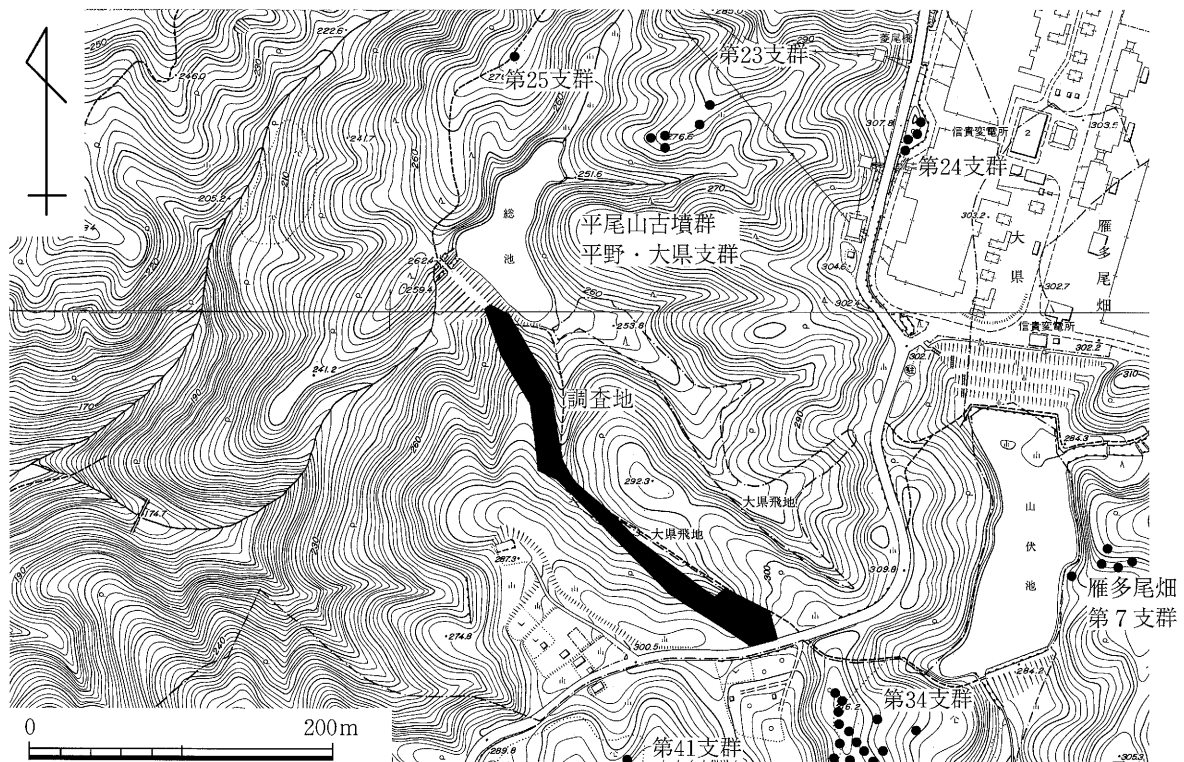


図-12 調査地位置図

した。それに続いて掘削にかかり、すべてのトレンチで、地山まで掘り下げて遺構・遺物の有無を確認した。

1トレンチは、尾根から北斜面にかけての位置に設定し、70～110cmの深さで地山に至った。2トレンチは、1トレンチの西、尾根のやや高まった位置に設定した。最も古墳の存在する可能性が高いと考えていた箇所であったが、20～60cmの深さで地山が検出された。3トレンチは2トレンチのさらに西、尾根の先端に設定した。地山まではやや深く、70～135cmを測るが、古墳に関わるようなものは、まったく認められなかった。

いずれも地山は花崗岩の風化した赤褐色砂質土で、地山まではすべて自然堆積の明褐色土であった。それぞれのトレンチで、地山は地形に即して東から西へと下がっており、自然地形と考えられるものであった。遺構はまったく確認できなかった。また、明褐色土からも、まったく遺物の出土をみなかった。

3. まとめ

切り土予定地は、狭い尾根から北斜面にかけてであり、1トレンチの東側は、傾斜の強い北斜面となり、古墳の存在は考え難かった。また、3トレンチは尾根先端に位置し、西側は急激に落ち込んでいる。よって、トレンチを設定した箇所以外に古墳が存在する可能性は非常に低く、今回の調査対象地内には、古墳は存在しないと結論づけた。工事に着手して支障ないと考え、その旨を下水道課に回答した。

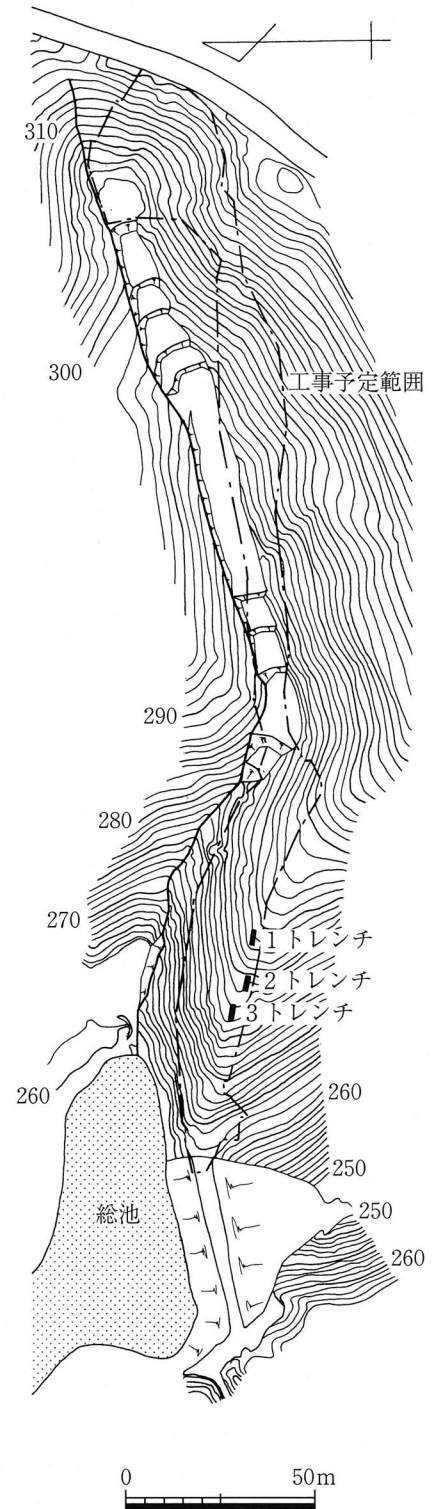


図-13 調査地地形図

付 章 鳥坂寺僧房跡周辺出土平瓦の再整理

1. これまでの研究

柏原市高井田に位置する高井田廃寺は、これまでの調査・研究によって、『続日本紀』に記載のみられる鳥坂寺跡であると推定されていたが、1983年度の調査によって出土した「鳥坂寺」と墨書された土師器坏が、これを確定したとあってよいだろう。よって、ここでは鳥坂寺跡という遺跡名を使用する。

鳥坂寺は、高井田の現集落から谷川を挟んだ北側の台地上に位置する。塔跡は式内社天湯川田神社の境内に位置し、金堂・講堂跡は近鉄大阪線の線路を挟んで北東のぶどう畑内に、高まりとなって残されている。これら主要伽藍は、1961・62年度に調査が実施されており、基壇の規模や構造などが確認されている。なかでも、凝灰岩壇上積み基壇の金堂は、石階を残しており、非常に残存状態の良好なものである⁽⁷⁾。

その後、鳥坂寺の東側一帯で区画整理事業が実施され、それに伴って1983年度から1986年度まで、断続的に調査が実施された。この調査によって、金堂南東部では奈良時代の僧房・食堂と推定される建物が確認され⁽⁸⁾、また、東側一帯には鳥坂寺を創建、維持したと考えられる人々の大規模な集落跡が確認されている。7世紀代の古墳も2基確認されている⁽⁹⁾。

その後、1987・88年度に、国民年金健康保養センター・サンヒル柏原の建設に伴う調査において、集落域がさらに北へ広がっていることを確認し⁽¹⁰⁾、1989年度には天湯川田神社の拝殿建て替えに伴って、塔跡の再調査を実施している⁽¹¹⁾。

これらの調査の詳細について述べる余裕はないが、鳥坂寺の出土遺物のなかで特に目を惹くものに平瓦がある。柏原市内から出土する古代寺院の平瓦には、多種類の叩きがみられることが知られているが、そのなかでも鳥坂寺の平瓦には多種多様の叩きが施されており、柏原市内出土平瓦の叩き目のほとんどすべてが鳥坂寺にみられる点で注目される。この平瓦に注目すると、瓦生産工人集団の解明や、各寺院の創建年代など、古代寺院研究に果たす意義が大きいと考え、これまでに、筆者は報告・検討を加えてきたところである⁽¹²⁾。しかし、肝心の基礎データが示されていないならば、検討を加えるにも限界がある。そこで、1983・84年度に実施された僧房跡周辺の調査⁽¹³⁾によって出土した平瓦を再整理し、新たなデータを提供したいと考えた。

平瓦の叩き目については、1961・62年度の調査報告によって既に注目されており、詳細な分類も試みられている⁽¹⁴⁾。ここでも、基本的にその分類を踏襲したいと考える。

分類基準は、A類が格子文様、B類が綾杉文様、C類が平行線文を主としたもの、D類が線の交錯している複雑なもの、E類が縄目文様、F類がA～E類の文様を混用したものとされている。各類は、さらに3～15に細分され、A-1類、A-2類というように細分されている。分類による拓本については、図-14・15に転載した⁽¹⁵⁾。

以下、僧房跡周辺出土の平瓦について、実例を掲げて紹介したい。

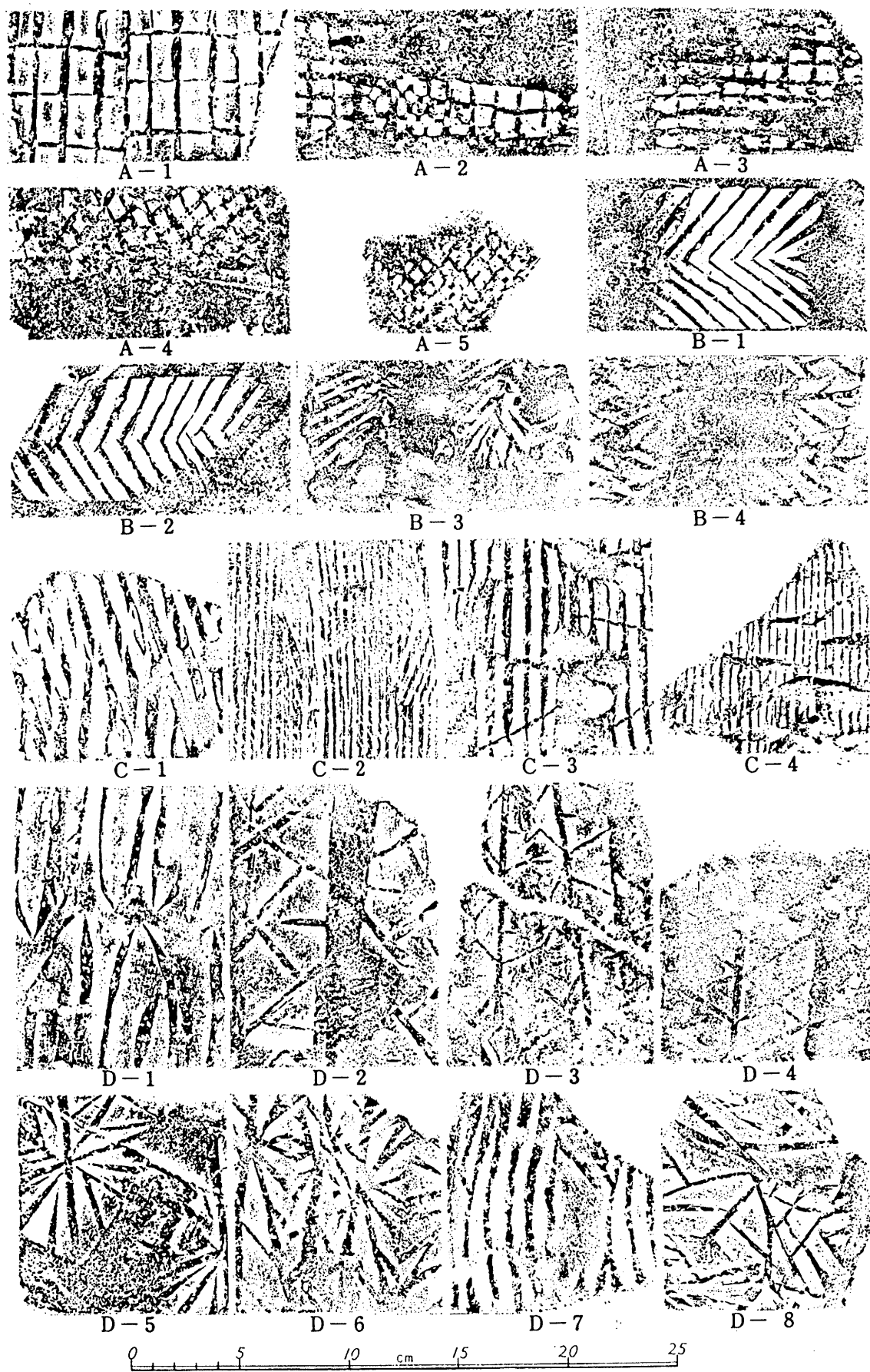


図-14 鳥坂寺出土平瓦叩き目の分類①

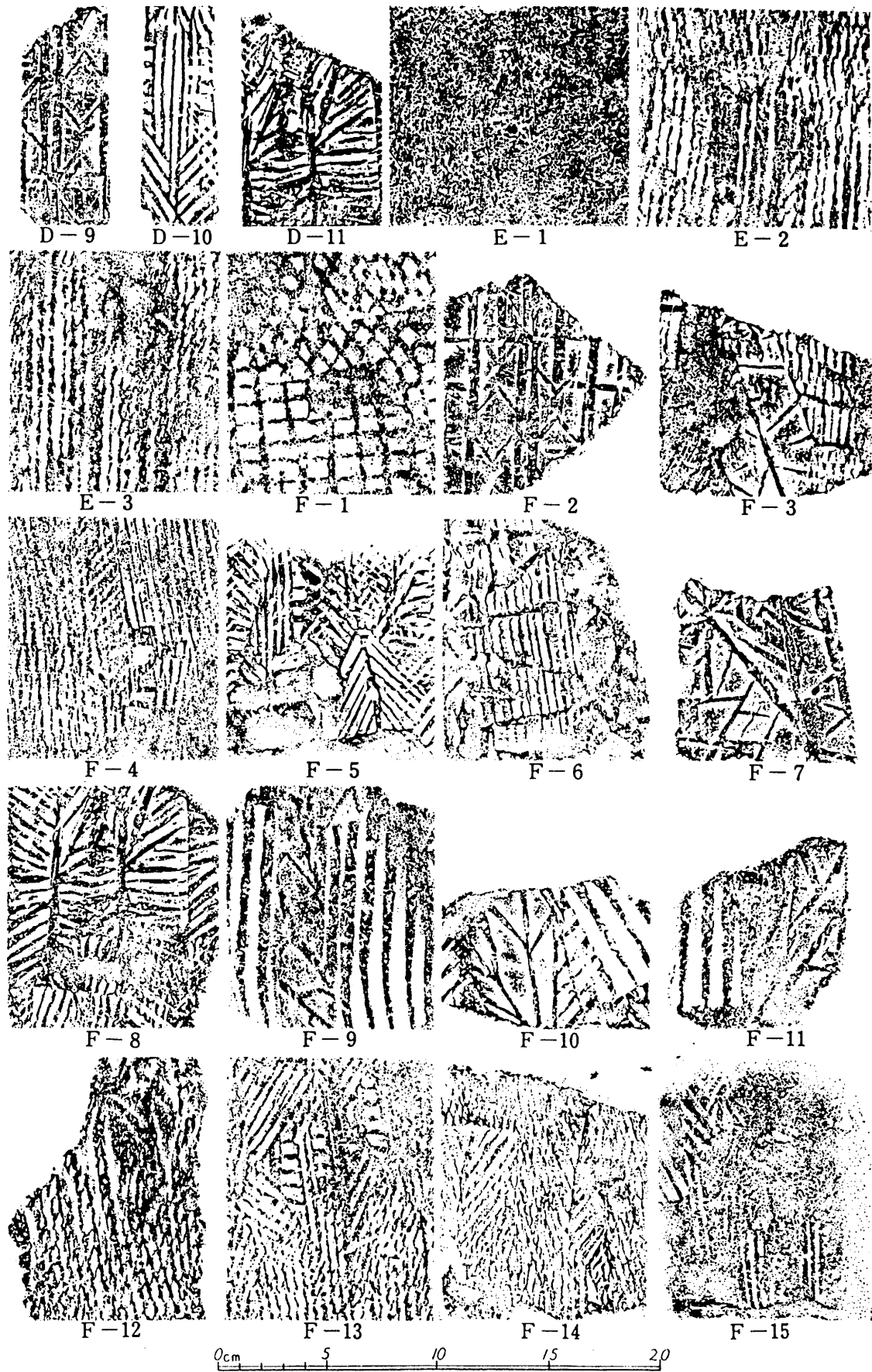


図-15 鳥坂寺出土平瓦叩き目の分類②

2. 僧房跡周辺出土の平瓦

1はA-1類。やや縦長の格子文で凸面全体を叩く。凹面は布目痕の上から糸切りを施している。側面はヘラケズリ、粘土板の継ぎ目がみられる。厚さが2.8cmと厚いのが特徴である。淡橙色を呈し、焼成は良好、長石や雲母の砂粒を含む。

2はA-2類。正方形の格子文を凸面全体に施すようである。側面はヘラ切りの後、分割破面をヘラケズリ調整。橙色を呈し、焼成は良好である。

3はA-2類の変形で、A-6類とする。正方形の格子内に、1本の対角線を伴う。この対角線には、必ずしも規則性はみられない。赤褐色を呈し、焼成は良好である。

4はB-2類。やや単位の細かい無軸綾杉と思われるが、平行線文を不規則に叩いている可能性もある。いずれにしても典型的な綾杉文ではない。綾杉叩きは、凸面をナデた後に施され、一部をさらに磨り消している。凹面は布目痕に先行する糸切り痕がみられ、一部では布目がヘラケズリで消されている。側面はヘラ切りの後に分割破面をヘラケズリ、広端面はヘラケズリで仕上げる。厚さは、中央に比して側面でかなり薄くなっている。粘土板の継ぎ目がみられる。灰色を呈し、焼成は良好。凹面には「大」の墨書がみられる。

5はB-4類、有軸綾杉文の変形と思われるが、これもはっきりしない。側面は、凸面までおよぶヘラ切りが施される。橙色を呈し、焼成は良好である。

6もB-4類。単位の細かい有軸綾杉叩きを施すが、これに先行する縄目がわずかに認められ、F類と分類するべきかもしれない。凹面には、幅2.4cm前後の模骨痕が明瞭に残る。側面はヘラ切りによる分割の後、破面は未調整である。色調は暗灰色、須恵質である。

7もB-4類に含めていいだろう。細長い有軸綾杉文叩きを施し、凹面には幅2.3cm前後の模骨痕が残る。側面はヘラ切り後、分割破面をヘラケズリするが、破面が一部残っている。凹面側の角には、さらにナデを施している。粘土板の継ぎ目がみられ、色調は黒灰色、焼成はやや軟質、煤が表面に付着している。

8はC-1類と思われるが、先行する叩きがありそうである。側面はヘラ切り後、凹凸両面の角にヘラケズリを加えている。狭端面はヘラケズリによって鋭角をなしている。灰色を呈し、焼成は良好である。

9はC-2類。平行線文の叩きを凸面全面に、しかも重ねて施している。側面はヘラ切りによる分割後の破面にヘラケズリを加えるが、破面がかなり残っている。さらに、凹凸両面の角にヘラケズリを施している。色調は灰色、焼成は良好である。

10もC-2類である。平行線文の叩きを長軸に対して斜位に施した後、平行に施している。側面は分割破面を未調整のままである。広端面は強いヘラケズリによって平坦に調整されている。色調は、凸面が灰色、凹面が黄橙色、焼成は良好である。

11はC-3類。平行線を貫く斜線を伴う叩き目である。凹面には布目に先行する糸切り痕がみられる。側面はヘラ切り後、分割破面および凹面側にヘラケズリを加える。色調は灰色、焼成は良好である。

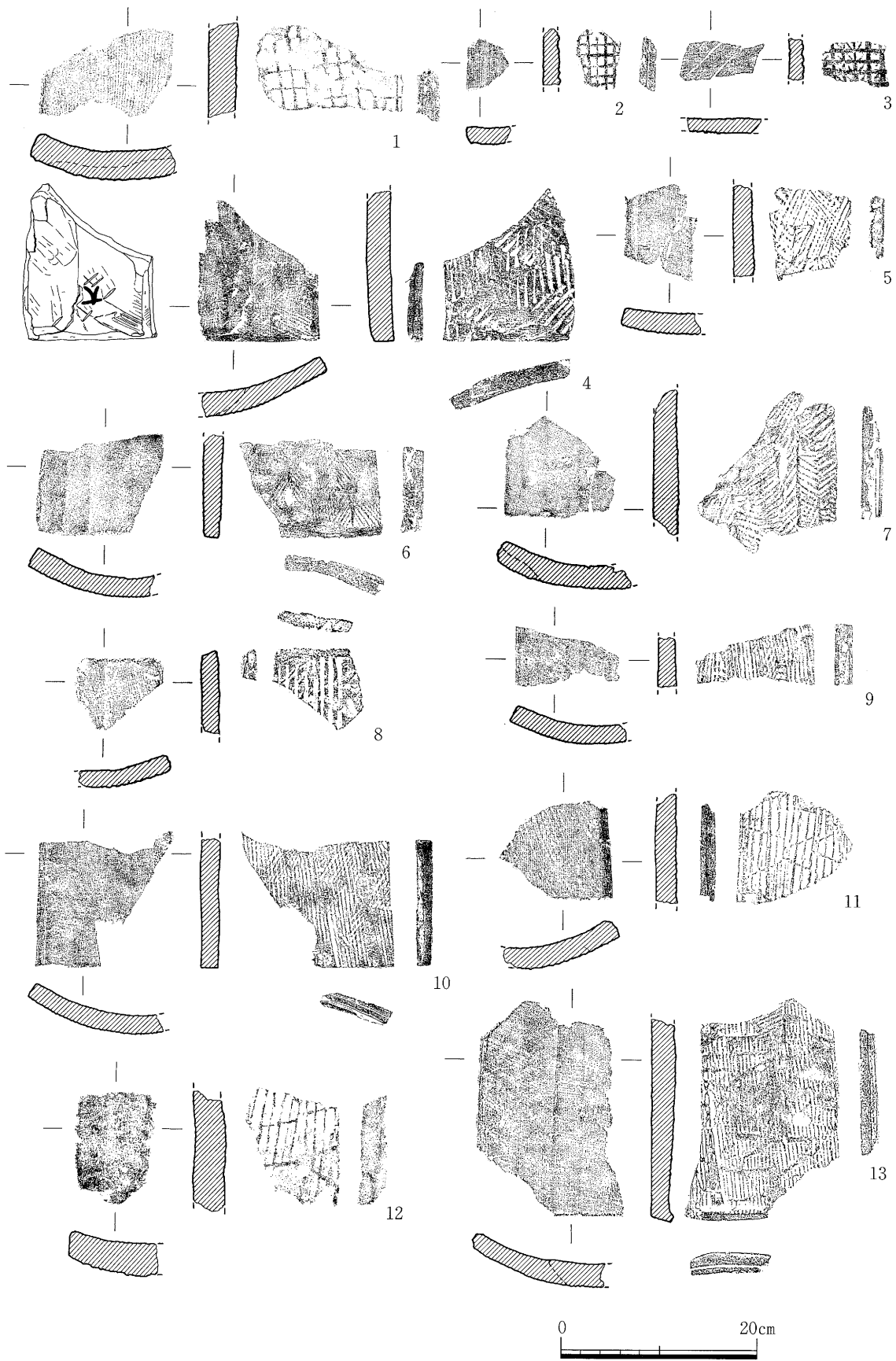


图-16 平瓦①

12もC-3類に含めるが、11の平行線の幅が6mm前後であるのに対して、12では8mm前後となる。なお、本来の分類では幅4mm前後とされている。しかし、基本的な文様は同一なので、すべてC-3類としておきたい。凹面は磨滅のため詳細不明。側面は分割破面をヘラケズリで調整するが、やはり詳細不明である。厚さが3.2cmとかなり厚い。灰色を呈し、焼成は良好。

13はC-4類。文様の構成はC-3類と同じであるが、平行線の幅が非常に細かいものである。側面は凹凸両面の角をヘラケズリで仕上げる。広端面は、ヘラケズリを施した後、凸面側にはみ出した粘土をヘラケズリで削っている。粘土板の継ぎ目がみられ、色調は灰色、焼成は良好である。

14はD-1類。全体の文様は不明であるが、太い数本の弧線が複雑な文様を構成する。側面はヘラケズリ、凹面側にもヘラケズリを施す。広端面もヘラケズリ調整である。

15もD-1類。鋭角をなす木の葉状の弧線が規則的に配置される。凹面には3cm前後の間隔で模骨痕がみられる。側面は、凹面側をヘラケズリ、凸面側は45°前後の角度で幅の広いヘラケズリを施す。この2面のヘラケズリによって、側縁断面形は三角形状となる。灰色を呈し、焼成は良好、二次的に火を受けており、凹面に煤が付着している。

16もD-1類とするが、14とも15とも多少異なる文様である。側面はヘラ切り痕を残し、凹凸両面側ともにヘラケズリを施している。広端面もヘラケズリで平滑に仕上げている。色調は淡灰褐色、焼成は良好である。

17はD-3類。1本の軸から細い斜線が不規則に延びる。凹面には布目に先行する糸切り痕がみられる。側面はヘラ切りをわずかに残すが、凹凸両面ともに数回のヘラケズリによって、丁寧な調整を施している。広端面も強いヘラケズリによって仕上げている。色調は凸面が黒灰色、凹面が暗赤褐色、焼成は良好である。

18もD-3類に含めたいと考える。17の文様に一部弧線を伴い、叩く向きも斜めとなる部分がある。凹面には糸切り痕が残る。側面は全体を平滑に仕上げるヘラケズリ、凹面側には再度ヘラケズリを施す。色調は淡褐色、焼成は良好である。

19もD-3類とする。磨り消している部分や複数に叩く部分などがあって、わかりにくい。側面はヘラ切り痕を残すが、やはり凹凸両面側にヘラケズリを加えている。狭端面もヘラケズリで平滑に仕上げる。灰褐色を呈し、焼成は良好である。

20もD-3類と分類するが、他の例に比べて一つの単位幅が広がっている。凹面には長軸に平行するような糸切り痕がみられる。側面はヘラ切り痕を残し、凸面側を2度にわたってヘラケズリを施す。色調は青灰色、焼成は良好。

21はD-7類。平行する弧線によって構成される文様である。端面はヘラケズリ。凸面は灰色、凹面は暗灰色、焼成は良好、須恵質である。

22もD-7類。一部で磨り消しがみられる。側面は凹凸両面側に強いヘラケズリを施し、断面が三角形状になる。狭端面は強いヘラケズリによって平滑面をなす。色調は淡橙色、焼成は良好である。D-1・3・7類の平瓦は、いずれも側面調整が丁寧であり、分割破面を残す個体はほとんどみられない。D類の特徴として認識できると思われる。

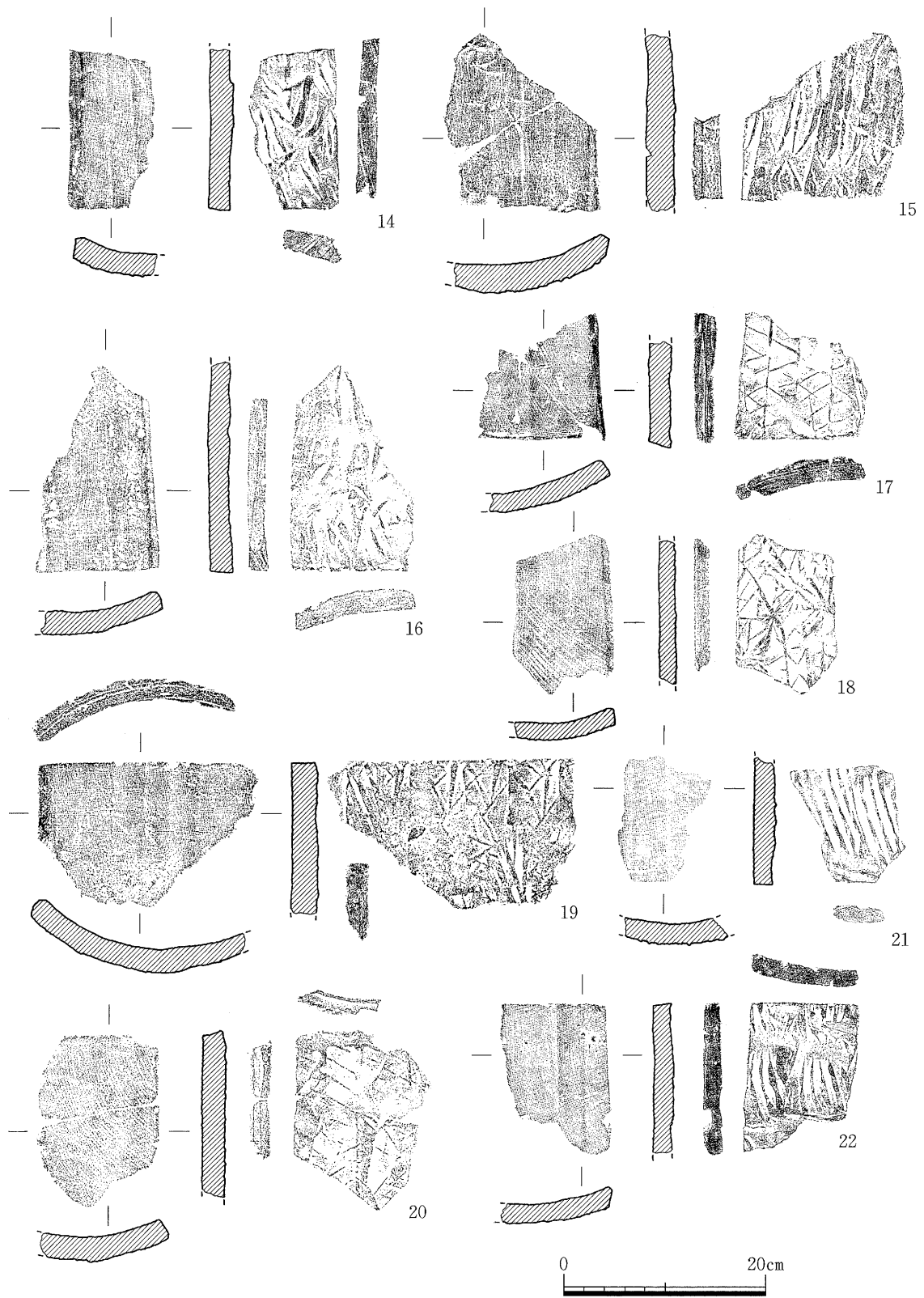


图-17 平瓦②

23はD-10類。有軸綾杉と平行線を組み合わせた叩き目を凸面全面に施す。凹面は布目を一部ナデ消しており、幅3cm前後の模骨痕が明瞭に残る。側面は分割破面を未調整、狭端面はヘラケズリによって平滑に仕上げる。暗灰色を呈し、焼成は良好、二次的に火を受け、凸面に煤が付着している。

24もD-10類。凹面には幅2.1cm前後の模骨痕が残る。側面は分割破面をヘラケズリ、凹面側にもヘラケズリを施す。淡褐色を呈し、焼成は良好。

25はE-3類、縄叩き目である。縄目は3.5本/cm、一部をナデ消している。凹面には最終調整として凸部を削り取るために施した糸切り痕がみられる。側面、端面ともにヘラケズリ。曲率が弱く、側面の形状から考えると一枚作りの可能性が考えられるが、凹面に模骨痕と考えられる痕跡が残っていることから桶巻き作りと考えておきたい。色調は灰色、焼成は良好である。

26から39はF類である。しかし、過去の分類に該当しないものも多いため、細分はせず、個々の例について記述をすすめていく。

26は2本の線を斜交させ、その交点から放射状に直線を延ばしたD-5類の後に、長方形格子文のA-1類を施したものである。側面はヘラ切り、端面はヘラケズリ調整である。色調は赤褐色、焼成はやや軟質である。

27は有軸綾杉(B-4類)と思われる叩きの後に、A-5類の格子叩きを、どちらも斜位に施している。表面の磨滅が激しく、凹面の布目もまったく認められない。橙色を呈し、焼成はやや軟質である。

28はB-4類と思われる有軸綾杉叩きの後に平行線に斜線を伴うC-4類の叩きを施す。広端縁から4cmの位置で、両者の叩きは明瞭に区分され、弱い段をなしている。側面はヘラ切りが浅いため、分割破面に施したヘラケズリが不十分で、破面を大きく残している。広端面はヘラケズリ、やや凹面側に反っており、端面寄りの凸面にはヘラケズリを施している。灰色を呈し、焼成は良好。

29はD-10類の後にC-2類の叩きを施したもので、F-4類に該当する。側面は分割破面未調整であるが、凹凸両面側の角にヘラケズリを加える。広端面はヘラケズリ調整、凹凸両面の端面寄りにもヘラケズリを加える。色調は灰色、焼成は良好。

30はC-4類を全面に叩いた後、D-3類を部分的に斜位に施し、F-3類に該当する。側面はヘラ切り、凸面側のみヘラケズリ。灰色を呈し、焼成は良好。

31も30と同様の叩きで、F-3類に該当する。凹面には横方向への糸切り痕がみられ、布の合わせ目も確認できる。側面はヘラ切り、分割破面をわずかに残し、凹凸両面の角にヘラケズリを施す。広端面には強いヘラケズリを施す。色調は暗赤褐色、焼成は良好。

32はD-3類の後にC-4類を部分的に施していると考えられ、30・31と同一の叩きを施しながらも、叩きの前後関係が逆になっているが、F-3類として認識できるものである。側面はヘラケズリを4回以上にわたって施す丁寧な仕上げであり、断面は二等辺三角形状となる。端面は強いヘラケズリで、凹面側にやや粘土がはみ出して、肥厚している。色調は灰色、部分的に淡褐色、焼成は良好。

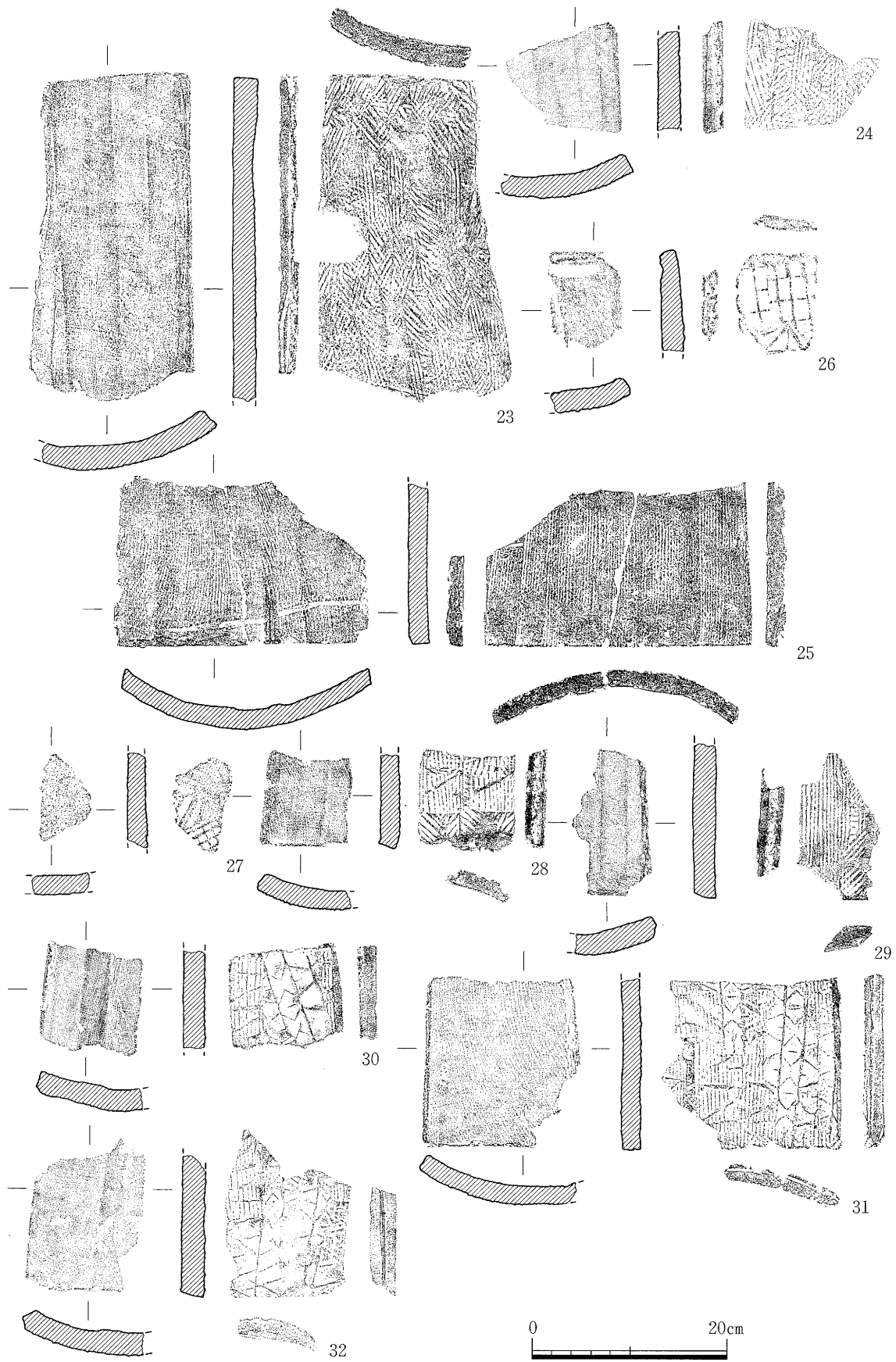


图-18 平瓦③

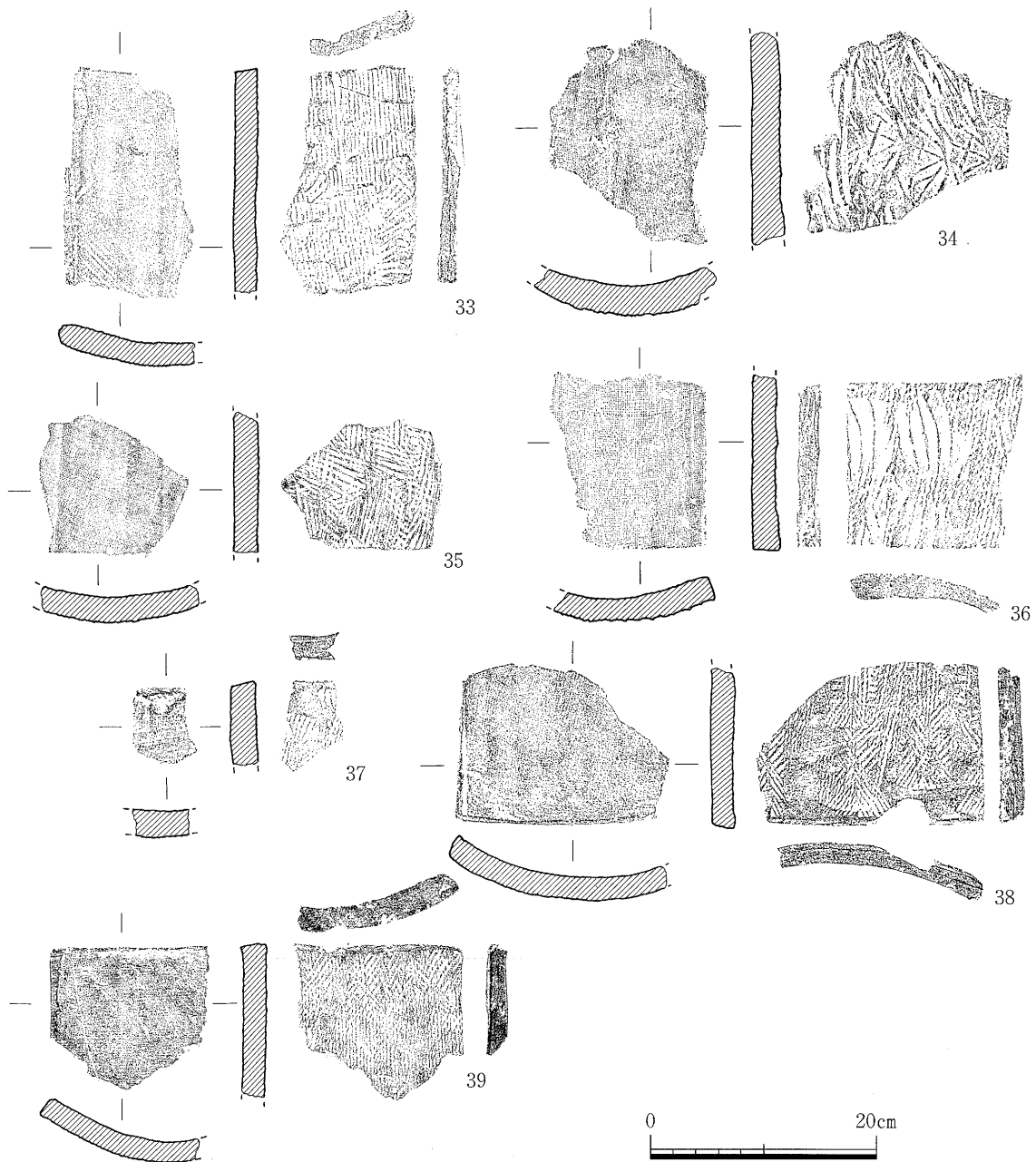


図-19 平瓦④

33はC-4類を凸面全面に施した後に、有軸綾杉と平行線を組み合わせたD-10類と思われる叩きを施している。側面にはヘラ切りをやり直した痕跡をとどめており、一部に分割破面も残している。その後のヘラケズリは3回以上にわたって行われており、調整は比較的丁寧である。狭端面もヘラケズリ調整。色調は凸面が暗灰色、凹面が灰色。焼成は良好である。

34は平行する弧線によるD-7類の後に、2本の斜線の交点から放射状に直線を延ばしたD-5類の叩きを施している。色調は灰色、焼成は良好である。

35~39は、縄叩きと他の叩きを併用するもの。35は縄叩き目(E-2類)の後に、有軸綾杉のB-3類を施し、F-14類に該当する。色調は凸面が暗灰色、凹面が灰色、焼成は良好である。

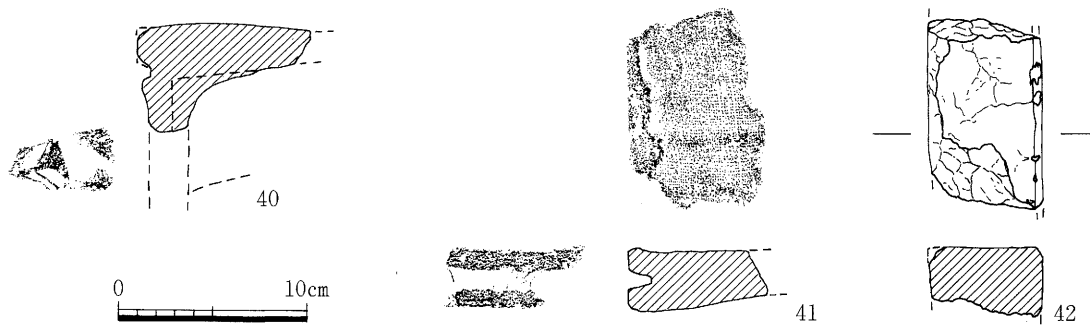


図-20 軒瓦・埴

36は縄叩き目(E-3類)の後に、D-7類を施す。側面は一部に分割破面を残すが、数回のヘラケズリを施して調整している。端面はヘラケズリによって平滑な面をつくる。凸面は灰色、凹面は暗灰色を呈し、焼成は良好である。

37は縄叩き目(E-3類)の後に、平行線(C-2類)を施す。端面はヘラケズリ。灰色を呈し、焼成は良好。

38は縄叩き目(E-2類)を部分的にナデ消した後に、有軸綾杉と平行線を組み合わせたD-10類を施す。側面は分割破面に部分的にヘラケズリを施すが、破面が多く残る。広端面はヘラケズリ。灰色を呈し、焼成は良好である。

39は有軸綾杉(D-10類)を施した後に、縄叩き目(E-2類)を施し、F-13類に該当する。通常は縄叩きが先行するのだが、39では前後関係が逆転している。側面、端面ともにヘラケズリ調整。色調は黄灰色、焼成は良好である。

3. その他の瓦

今回の再整理の際に、軒丸瓦、軒平瓦、各1点を確認したので、ここで報告しておく。

40は重弁蓮華文軒丸瓦の小片である。灰色を呈し、焼成は良好である。鳥坂寺では、これまでに飛鳥・白鳳期の瓦11種類、奈良時代の瓦2種類が知られており、本例は従来の分類でV型式、もしくはV'型式とされる軒丸瓦である。両型式は同範であり、V型式の外区には珠文を伴うことによってV'型式と区別されるが、V型式の特徴である瓦当厚が薄い点、灰色の色調を呈する点などから、本例はV型式に該当すると考えられる。V型式は鳥坂寺でもっとも出土例の多い軒丸瓦であり、金堂の創建瓦と考えられているものである。僧房跡周辺の報告では、V'型式4点が報告されており、V型式は報告されていない。

41は二重弧文軒平瓦。平瓦の端面に深い凹線を押しつけることによって重弧文とする無顎式の軒平瓦である。凸面はナデ、凹面には布目と模骨痕がみられる。灰色を呈し、焼成は良好。この型式の軒平瓦は、金堂跡から15点、講堂跡から1点、僧房跡周辺から3点出土している。

42は埴。平坦な3面を残すが、全形は不明。幅は6cm。板状工具によってナデ仕上げとする。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

4. 平瓦叩き目について

平瓦の叩き目は細分すると、おそらく50種類以上になるであろう。しかし、必要以上の細分は実態をわかりにくくするだけと思われるので、基本的に従来分類を踏襲する。従来分類に加えたものは、A-6・7類とD-12類である。A-6類は正方形の格子内に1本ずつの対角線が入るものであり、A-7類は平行四辺形からなる斜格子文、D-12類は1本の軸線から上斜方向に数本、横に2本、下斜方向に数本の直線がのびる叩き目である。いずれも塔跡の調査で多く出土したために設定した類である。

塔跡から出土した平瓦については1009個体の分類を試み⁽¹⁶⁾、今回、僧房跡周辺から出土した平瓦については4908個体の分類を試みた。いずれも叩き目の判別できるすべての個体について観察、分類したものである。小片からの分類は曖昧な点を含んでおり、必ずしも実態を示した数値とはいえないかもしれない。しかし、すべて筆者が自ら分類したものであり、一応の傾向は把握できると考えている。

まず、塔跡出土平瓦と僧房跡周辺出土平瓦の違いについてみておきたい。格子叩きのA類においては、塔跡ではA-2・6類の出土が多い点が注目され、僧房跡周辺でA類の出土自体が少ないものの、もっとも多いのは長方形格子のA-1類と際違った差をみせる。綾杉叩きのB類においては、塔跡ではほとんど出土していないが、僧房跡では有軸綾杉のB-4類が比較的多く出土している点が注目される。平行線を主とするC類は、どちらもかなり出土しているが、塔跡でみられないC-1・2類が僧房跡周辺でみられ、どちらもC-4類がもっとも多く出土している。しかし、塔跡で20.7%を占める比率は、僧房跡周辺では5.7%とかなり低くなっている。線の交錯しているD類は、塔跡で出土しているが僧房跡周辺では出土しないものとしてD-11・12類、僧房跡周辺で出土しているが塔跡で出土しないものとしてD-4・6・8・10類をあげることができる。

縄叩き(E類)は、桶巻き作りのもの(E-a類)と一枚作りのもの(E-b類)に区別したが、小片ではいずれとも決しがたいものも少なくない。E類は塔跡では全体の28.7%、僧房跡周辺では67.0%を占める。その中で、一枚作りのものは塔跡で27%、

類	塔跡	僧房跡周辺
A-1	2 (0.2)	65 (1.3)
A-2	129 (12.8)	2 (0.0)
A-3	0	2 (0.0)
A-4	0	8 (0.2)
A-5	0	3 (0.1)
A-6	50 (5.0)	1 (0.0)
A-7	4 (0.4)	0
B-1	3 (0.3)	6 (0.1)
B-2	0	2 (0.0)
B-3	0	0
B-4	0	57 (1.2)
C-1	0	4 (0.1)
C-2	0	34 (0.7)
C-3	12 (1.2)	103 (2.1)
C-4	209 (20.7)	278 (5.7)
D-1	47 (4.7)	185 (3.8)
D-2	11 (1.1)	36 (0.7)
D-3	47 (4.7)	240 (4.9)
D-4	0	6 (0.1)
D-5	4 (0.4)	3 (0.1)
D-6	0	59 (1.2)
D-7	83 (8.2)	119 (2.4)
D-8	0	15 (1.2)
D-9	0	0
D-10	0	133 (2.7)
D-11	13 (1.3)	0
D-12	55 (5.5)	0
E-a	212 (21.0)	1908 (38.9)
E-b	78 (7.7)	1377 (28.1)
F-a	46 (4.6)	222 (4.5)
F-b	4 (0.4)	40 (0.8)
合計	1009	4908

表-2 鳥坂寺出土平瓦叩き目分類表
()内は%

僧房跡周辺で42%を占める。既報告では、金堂・講堂跡からは一枚作りはまったく出土していないとされ、僧房跡周辺からもほとんど出土しないとされている⁽¹⁷⁾。しかし、今回の再整理ではかなりの量の一枚作りと考えられる平瓦が確認でき、従来の報告に疑問を抱かざるを得ない。奈良時代の軒丸瓦(XI類)が4点出土していることから、差し替え瓦として一枚作りの瓦が使用されていることは想像に難くない。

複数の叩き原体を使用したF類は、塔跡で5.0%、僧房跡周辺で5.3%を占める。この中で、縄叩きを使用しないもの(F-a類)と、縄叩きを使用するもの(F-b類)に区別した。F類は細分できるのだが、小片では分類の困難なものが多いため、もっとも明瞭な縄叩きの有無によって区別したものである。講堂跡周辺で出土する平瓦の大半がF-4類(C-2+D-10)とF-5類(B-3+C-10)であるということだが、F-4・5類は僧房跡周辺では非常に少なく、塔跡ではまったく出土していない。

僧房跡周辺出土の平瓦の大半が、1983年度調査の谷-2から出土している。谷-2は僧房・食堂と推定される掘立柱建物のすぐ東に位置し、谷-2が埋没した7世紀末頃にこれらの建物が建設されたとされる。しかし、一枚作りの平瓦が少なからず出土している点に疑問も残る。

僧房跡にもっとも近い主要伽藍は金堂である。よって、今回の再整理の結果は、金堂の様相に近いことが推測され、その点では、塔跡出土平瓦とかなり傾向が異なる事実や、講堂跡出土平瓦の大半を占めるとされるものがほとんど出土していないこともこれを裏付けているように思われる。その中で、縄叩き(E類)の多さは何を物語っているのだろうか。これについては、修復等に伴う差し替え用の瓦が僧房跡周辺に保管されていた可能性が考えられ、いまひとつの可能性として奈良時代頃の小規模な瓦葺きの建物、例えば鐘楼や経楼が僧房周辺に存在したことが考えられる。寺域東側の高井田遺跡からも一枚作りの平瓦は多数出土しており、今後、注意しておくべき事実である。

側面の調整をみると、金堂・講堂跡出土平瓦の大半が分割破面未調整であり、A-3類、B-1・2類はヘラケズリを加えることによって面取りしているということであるが、塔跡や僧房跡周辺では未調整のものは少なく、大半はヘラケズリ調整を加えている。とくにD類では凹凸両面に非常に丁寧なヘラケズリを加えている。

また、叩き目の方向が瓦の長軸に対して縦方向になる叩きと横方向になる叩きが混用されることはない指摘されており、今回の再整理でも同様な事実が指摘できる。なお、横方向の叩きの大半は、何らかの叩きを磨り消した後に、スタンプ状に叩きを施すものであり、縦方向に叩きを施すものは、基本的に凸面全面に叩きを施すものである。

柏原市域出土の古代寺院に伴う平瓦には多種類の叩き目がみられるが、その中でも鳥坂寺はもっとも種類が多いことが確認されている。以上のような叩き目の分類、分析は、今後、瓦生産工人を研究するに際しての基礎資料としてデータを提示しておきたいと思う。

筆者の見通しとしては、以前にも触れたように⁽¹⁸⁾、大県郡、安宿郡を中心に複数の工人集団の系譜があり、それらが、必要に応じて組織、解体されたものと考えている。その中心が、鳥坂寺の瓦生産に従事した工人集団だったと考えている。

注

- (1) 大阪府教育委員会・柏原市教育委員会『柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書』1980
- (2) 柏原市教育委員会『柏原市遺跡群発掘調査概報1992年度』1993
- (3) 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1981年度』1982
- (4) 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1983年度』1984
- (5) 柏原市教育委員会『太平寺古墳群』1983ほか
- (6) 柏原市教育委員会『平尾山古墳群－雁多尾畑49支群発掘調査概要報告書－』1989
- (7) 大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』1968
- (8) 柏原市教育委員会『鳥坂寺－寺域の調査－』1986
- (9) 柏原市教育委員会『高井田遺跡Ⅰ』1986
柏原市教育委員会『高井田遺跡Ⅱ』1987
- (10) 柏原市教育委員会『高井田遺跡Ⅲ』1989
- (11) 安村俊史「高井田廃寺89－2次調査」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1989年度』柏原市教育委員会 1990
- (12) 安村俊史「柏原市域出土平瓦の叩き目について」『摂河泉古代寺院論纂』第1集 摂河泉古代寺院研究会・摂河泉文庫 1997
- (13) 注(8)に同じ
- (14) 注(7)に同じ
- (15) 注(7)に同じ
- (16) 注(12)に同じ
- (17) 注(7)・(8)文献による
- (18) 注(12)に同じ

版 図

図版1 平尾山古墳群99-1次調査



トレンチ(北から)



トレンチ(南から)



西壁土層

図版2 平尾山古墳群99-3次調査



1 トレンチ土層 (西から)



2 トレンチ (西から)



2 トレンチ (東から)

図版3 平尾山古墳群99-3次調査



2 トレンチ土層
東半(北から)



2 トレンチ土層
西半(北から)



2 トレンチ
溝状遺構(西から)

図版4 平尾山古墳群99-3次調査



3 トレンチ
(東から)



4 トレンチ
(東から)



5 トレンチ
(東から)

図版5 平尾山古墳群99-3次調査

6 トレンチ
(南から)



7 トレンチ
(北から)



7 トレンチ
(東から)



図版6 平尾山古墳群99-3次調査



8トレンチ
(西から)



9トレンチ
(南から)



10トレンチ
(南から)

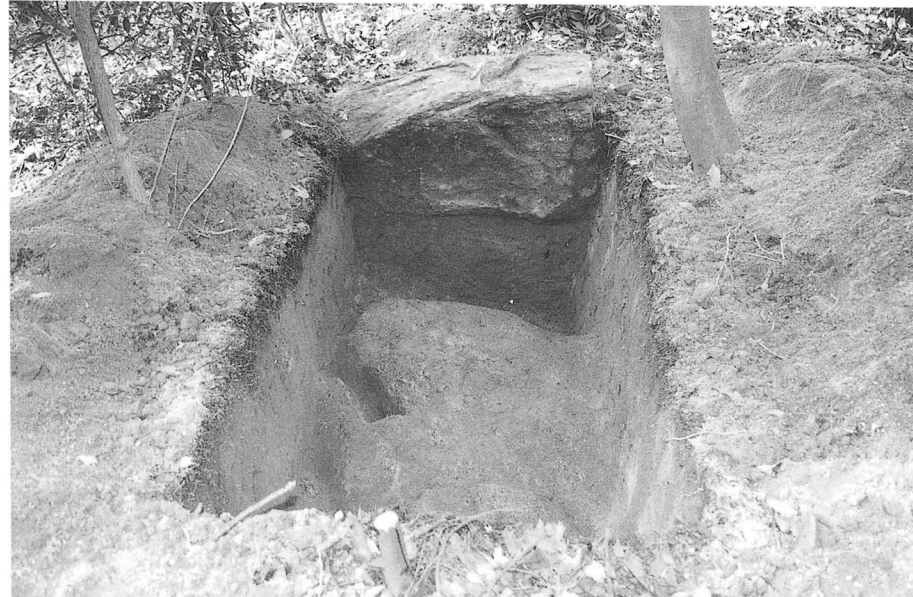
図版7 平尾山古墳群99-3次調査



11トレンチ
(北から)



12トレンチ
(南から)



13トレンチ
(南から)

図版 8 平尾山古墳群99- 4次調査



1 トレンチ
(西から)



2 トレンチ
(西から)



3 トレンチ
(西から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひらおやまこふんぐん							
書名	平尾山古墳群 1999年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名	柏原市文化財概報							
シリーズ番号	1999-II							
編著者名	安村俊史							
編集機関	柏原市教育委員会							
所在地	〒582-8555 大阪府柏原市安堂町1番43号 TEL 0729-72-1501							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらおやまこふんぐん 平尾山古墳群	おおさかふかしかしわらし 大阪府柏原市 たいへいじ 太平寺・安堂	27221	H O K 99-1	34度 34分 51～ 53秒	135度 38分 20～ 25秒	19990303 ～0316	10m ²	ダム建設
ひらおやまこふんぐん 平尾山古墳群	かりんどうぼた 雁多尾畑	27221	K R K 99-3	34度 35分 24～ 32秒	135度 39分 55秒～ 40分 9秒	19990318 ～0329	35.5m ²	一般廃棄物焼却残渣最終処分場建設
ひらおやまこふんぐん 平尾山古墳群	ひらの 平野	27221	H O K 99-4	34度 35分 28～ 35秒	135度 38分 47～ 54秒	19991201 ～1206	12m ²	ため池改修
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平尾山古墳群	古墳群	飛鳥～奈良	なし	土師器				
平尾山古墳群	古墳群	飛鳥～奈良	溝	土師器				
平尾山古墳群	古墳群		なし	なし				

平尾山古墳群

1999年度

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582-8555 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 (0729) 72-1501内線5134
発行年月日 平成12年3月31日
印刷 (株)近畿印刷センター

